

なぜか綾音がスライム
になって国造り！？

最上 イズモ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転スラの世界に綾音が転生しました

進路で投稿ペース月1くらいになるかも

目次

56	ø 9	新体制テンペストサミット	9
	ø 8	ガビル	51
	ø 7	鬼	48
	ø 6	別れ	44
	ø 5	爆炎の支配者	37
	ø 4	村の成長	32
	ø 3	帰還	25
	ø 2	ドアルゴンの技術	21
	EP : ø 1	ゴブリン村を国へ	9
	1	プロローグ データにない異世界	
	ø 2 2	覚醒	108
	ø 2 1	自由と責任	104
	ø 2 0	上位聖霊	98
	ø 1 9	シドウ	94
	ø 1 8	未練	91
	ø 1 7	悪意	87
	ø 1 6	新たな問題	83
	ø 1 5	争い	79
	ø 1 4	ミリム	75
	ø 1 3	天災？	71
	ø 1 2	同盟	67
	ø 1 1	国の拡大	64
	ø 1 0	悪食	60

ø	ø	ø	ø	ø
2	2	2	2	2
7	6	5	4	3
魔王会議	魔王会議前	終戦と復活	反転攻勢	罪と罰
130	123	119	116	112

プロローグ データにない異世界

アリアパイロット「宿舎にミサイル着弾損害不明」

オペレーター「綾音ちゃん避難してるよね？」

ミサイルが綾音の宿舎に着弾避難する最中だった

??? 「耐熱、耐爆耐性獲得成功しました」

破片が体に刺さる

??? 「刺突耐性獲得成功しました」

??? 「ツツケテ物理攻撃耐性獲得成功しました」

綾音「痛い。寒い」

??? 「痛覚無効を獲得成功しました血液が不要な体を作成します」

??? 「耐寒耐性獲得成功しました耐熱耐性と融合し熱変動耐性に変化しました」

医療班1 「止血とAEDを」

??? 「電流耐性、麻痺耐性獲得成功しました」

医療班2 「ダメでもう手遅れです」

医療班1 「せめて記憶のバックアップを」

医療班2 「了解しました。」

綾音 「来世では食べれなかった分もいっぱい食べよ」

??? 「ユニークスキル『捕食者』を獲得成功しました」

綾音 「カエデと一緒にならどこでも転生するよもう」

??? 「エクストラスキル『大賢者』を獲得さらに、転移時アシストAIカエデを付与成功しました」

死亡後転移

綾音 「あれ私死んだんだよね」

綾音 「前に行った天界ほくないけどどこだろ」

カエデ 「義眼起動します」

綾音 「つてここは洞窟？」

綾音 「これは草？つてなんか目線ひくすぎじゃない？」

綾音 「えなんで草が解けるといいうかなんか気持ち悪い感覚なにこれ」

綾音 「私に何に転生した!!!」

綾音 「弾んで弾力性が高い・・・」

綾音 「つてことは・・・スライム？」

洞窟内の水たまりで確認したり感覚を慣らすのに草や鉱石を吸収したりした

転生時に付与去られた大賢者が解析やこの世界のこと、スキルのことを教えてくれた
もちろんカエデは危機回避や対魔物戦のアシストしてくれた
遊んでるうちに水圧推進のスキルを獲得

数日後

ドラゴン「聞こえるか小さきものよ」

ドラゴン「聞こえるなら返事をしろ」

カエデ「発声器官がないため体内にスピーカーを装備します」

綾音「私は茨波綾音、つい数日前に転生したばかりですけどよろしくお願いします。」

ドラゴン「我を見ても怖がらないとはなかなか肝が据わつとるな」

綾音「まあ転生前にあなたよりでかい怪物とたたかってたんでw」

ドラゴン「われよりもつよいとな」

綾音「物理攻撃が効かなかつたりビームや鞭、で攻撃されたりするから痛いなのなんの」

ドラゴン「名前がまだだったな我が名は暴風龍ベルドラ」

ベルドラ「この世に4体のみ存在する龍種が1体である」

突然ベルドラが笑い出す

ベルドラ「おまえものすぐくまれな生まれ方をしたな」

綾音「稀？」

ベルドラ「異世界からやって来る者はいるが転生者は我が知る限りはじめてだ」

ベルドラ「魂だけで世界をわたると普通は耐えられないからな」

カエデ「この世界はわたしたちのポータルなしでも転移が可能な技術持つてるみたいですね」

綾音「転生ではなく転移してきた人間がいるんですね」

ベルドラ「うん、異世界人と呼ばれている」

ベルドラ「そういう者たちは世界を渡るときに特殊な能力を授かるらしい」

綾音「なるほど」

綾音「そういうことなら異世界人探してみます」

ベルドラ「なんだもう行くのか」

綾音「まあといってもベルドラさんからもう少しこの世界こと教えてもらいたいの
でいますけど」

綾音「そういえばこのシールド何ですか？」

ベルドラ「よくぞ聞いてくれた」

ベルドラ「300年前のことだ」

綾音「300年前ってまあでも龍種ならつい最近の感覚なんだろうな」

ベルドラ「うっかりミスして街を滅ぼしてしまっただけ」

綾音「規模が違うなーミスの」

ベルドラ「そんな我を討伐しに来た者がいてな」

ベルドラ「ちよびつと相手をなめてたのは間違いない」

ベルドラ「だが途中で本気を出したのだから」

ベルドラ「まけてしまったな」

綾音「ベルドラさん強そうなのにあいてはそんなに強かったですか？」

ベルドラ「ああ加護をうけた人間の勇者でな」

ベルドラ「ユニークスキル『絶対切断』で我を圧倒そして『無限牢獄』で我を封印」

綾音「それでこのシールドが無限牢獄なのね」

ベルドラ「ああその勇者は召喚者といっておったな」

綾音「人為的にここに召喚された異世界人？」

ベルドラ「そういうことになるなただ召喚者は兵器として期待される」

綾音「兵器？」

ベルドラ「召喚主のな召喚者は召喚主に逆らえないように呪いを魂に刻まれる」

綾音「なるほどそれでその勇者に封印されてからここで？」

ベルドラ「そういうことだももう暇で暇で」

綾音「そうだったんだよしよしゞ（・ω・、）」

綾音「そうだ私とお友達になりませんか？」

ベルドラ「スライムの分際で我とお友達だと!!!」

綾音「いやだった？」

ベルドラ「ばか嫌とは言っていないであろ」

綾音「つてことは？」

ベルドラ「そうだなどうしてもつていうんなら考えてあげてもいいんだからね」

綾音「これつてどこかで…」

綾音「よしなら決定ね」

ベルドラ「仕方あるまい機様と友達になつてやるわ」

綾音「これからよろしくね」

綾音「さて無限牢獄どうやって解除しようか」

ベルドラ「解決法があるならありがたいんだがあと100年ほどで私の魔力は底をつくところだったんだ」

綾音「だから珍しい葉草とか鉱石がすごい量あつたんだ」

綾音「魔力がなくなるとどうなっちゃうの？」

ベルドラ「大したことはないただ朽ち果てるだけだ」

綾音「あそうだからエドと大賢者さんに解いてもらえばいいんだ」

ベルドラ「??」

大賢者「可能性としては外側と内側で解析できれば解除できます」

綾音「ナイス！」

綾音「ベルドラさん、内側、外側で解析すればいいみたい非実体化できるカエデって
いうわたしのスキルと大賢者っていうスキルが解析するから」

ベルドラ「だが時間かかるのでは」

綾音「まあそんなかからないと思うけど数週間後くらいかかるからそうだと私が捕食者
で体内にベルドラさんを入れればいいんだ」

ベルドラ「ははははあつはははは」

ベルドラ「それは面白いぜひやってくれお主にわれのすべてをゆだねる」

綾音「じやあさつそk」

ベルドラ「まてお前に名前を付けてやろうお前も我に名をつけよ」

ベルドラ「同格というのを魂に刻むのだ人間というファミリーネームみたいなものだ
がそれは加護になる」

ベルドラ「おまえはまだ名無しだから名持の仲間入りになれるぞ」

綾音「ベルドラさんに名前つけてもらえればそれはうれしいです」

ベルドラ「いいだろうカツコイイ名を頼むぞ」

綾音「ベルドラさんもね」

綾音「んーゲヴィターとかはどうかな？」

ベルドラ「なにーゲヴィターだどー」

ベルドラ「サイコーの響きじゃないか——」

ベルドラ「今日から俺はベルドラ・ゲヴィターだどー」

ベルドラ「そしてお前にはリムルの名をあたえる」

綾音「リムルいいね」

ベルドラ「おまえはリムル・ゲヴィターを名乗るがいい」

綾音「さてといまから捕食者つかうね」

ベルドラ「ああ」

綾音、捕食者を使いベルドラを飲み込み無限牢獄の解析をする

マルチタスクモードにて同時に作業ができる

まあ数日間洞窟内を散策しエクストラスキル『水操作』、洞窟内の魔物狩りをして『毒霧吐息』、『熱源感知』、『身体装甲』、『麻痺吐息』、『粘糸・鋼糸』、『吸血・超音波』、を獲得した

さらに数日後に出口を発見し脱出した

EP：01 ゴブリン村を国へ

すると突然ゴブリンが立ちふさがる

ゴブリン「強きものよこの先に何か用事ですか？」

綾音「強きもの？」

綾音「初めましてリムル・ゲヴィターですよろしく願います」

ゴブリン「強き魔物が近づいたので警戒に来た所存です」

ゴブリン「強きものよあなたを見込みお願いがあります」

するとゴブリン村に行くことになった

村長「ようこそお越しいただきました私はここの村の村長をしております」

綾音「よろしく願います」

綾音「それでご用件は？」

村長「最近魔物の活動が活発なのはご存じでしょうか？」

綾音「そうなんですか？」

村長「我らの神がほど数日前に姿をお隠しになられたのですそのため近隣の魔物がこ

の地にちよっかいをかけてきたのです」

村長「我々も応戦したのですが戦力的に厳しく」

ゴブリン「そこであなた様に」

綾音「まあいいですけどなぜ私のようなスライムを？」

村長「はははご謙遜をただのスライムにそこまでのオーラは出せませんよそうとうに
なをさせる魔物なのでしょう」

綾音「オーラ？」

綾音「私どんなオーラになってるの」

カエデ「魔力センサーをTPPにします」

(ここ)というTPPは、Third Person Perspective、3人称視点のこと)

綾音「ここまでオーラ全開だったみたいねだからゴブリンさんたちを怖がらせてしまったみたいね」

綾音「怯えさせてしまっただけです私この世界に来たばかりです」

ゴブリン「転生者なのですか?!」

綾音「ええ」

ゴブリン「転生者は始めてだすごい！すごいよ！」

村長「これ失礼ではないか」

村長「そこでお願いなのですが」

東の方角から狼の魔物や牙狼属が押し寄せて多数の死傷者を出してるみたい

その中に名持の守護者のような戦士がいたみたいだけど討ち死し村は絶体絶命ということみたいね

村長「牙狼属は100匹程度、こちらが戦えるのはメスも含め60匹くらい」

綾音「村長、確認したいことがあります」

綾音「牙狼属を仲間として受け入れられますか？」

村長「な、なにをするおつもりで」

綾音「これは転生前のクデュックのやり方であり私のポリシーです」

綾音「敵も味方もそれ以外の行動が物理的または国、組織がなくなってしまう場合を除き大量破壊及び殺すことは禁止しできる限り仲間とすること」

綾音「また反逆や組織の規則、国の法律に違反する場合は死刑以外を選択すること」

村長「わかりました」

綾音「なら牙狼属を無力化してあげる」

すると牙狼属が村の塀付近に現れる

綾音「みんな心配する必要ないよ私が無力化するね」

綾音「圧倒的戦力を見せれば7割は降伏または撤退するまた残りの3割は説得を続け

れば問題なく仲間になる」

綾音「この世界は弱肉強食だがそんな時代は終わったこれからは共存の社会だ」

村長「ありがとうございます。私達は忠実なるしもべでございます」

綾音「任せて」

綾音「あそうそう負傷者ってどこ？」

村長「こちらです」

負傷者の下に行く

綾音「よく頑張ったねいままなおしてあげる」

洞窟でとった草をフルポジションにしたものをかける

その後全員を回復させる

村長「傷が治っておる」

村長「流石リムル様、ははあ」

全員ひれ伏す

綾音「ひれ伏さなくても…」

綾音「柵を作るよ」

ゴブリン「柵？」

その後夜になって牙狼属が襲ってくる

綾音「降伏か撤退すれば安全保障、不可侵および攻撃などはしないまた仲間になるとをゆるす」

綾音「好戦的態度を示すなら武力行使をする」

牙狼「ほざかしいスライムごときがわれら牙狼属に命令するなあの柵をなぎ倒せゴブリンどもを血祭りにあげろ」

綾音「宣戦布告を確認武力行使する」

麻痺吐息および低濃度毒ガス、水刃（打撃のみ）を散布、攻撃し牙狼属のほぼすべてを麻痺または気絶させた

綾音「残り戦力では戦闘続行不可能に思われますが降伏しますか？」

牙狼「我ら一同あなた様に従います」

綾音「???」

綾音「降伏ではなく服従？」

村長「勝ったのですか？」

綾音「うん」

ゴ布林全員「うおおおおおおお」

次の日

綾音「全員注目」

綾音「いまここで2人1組になりお互いがお互いのパートナーになります」

綾音「生涯のパートナーですのでお互いを尊重し大切に扱うこと」

綾音「この危機を乗り切った後大切で基本的なものを作るようにね」

綾音「それは衣食住、インフラ、拠点防衛」

綾音「そのためまずこの中で2班分けます」

綾音「1つは食材、建築資材調達班もう1つは警備班」

綾音「私は両方の監督しますまた適正をもとに班構成をし警備班は10人残りを食材建築資材班とします」

綾音「あと組織化するにあたって名前が必要なのでつけようとおもうけどいい？」

ゴブリン「な、なまえ？」

村長「よろしいのですか？」

綾音「うん」

ゴブリン牙狼両方とも大歓喜

綾音「早速村長からえーと守護者の名前は？」

村長「リグルです」

綾音「じゃありグルでどう？」

村長「ありがとうございますううリグル感激です!!!」

綾音「君は確か弟だったよね？」

ゴブリン「はい」

綾音「じゃありグルの名前継いだ方がいいよ」

リグル「リグル…ありがとうございます兄の名をいただき誠にうれしい限りです」

綾音「君はゴブタ」

ゴブタ「はいいいありがとうございます」

綾音「きみはゴブチ」

ゴブチ「えへえー」

綾音「きみはゴブツ」

綾音「きみはゴブテ」

綾音「きみはゴブゾウ」

綾音（これでいいのかな？）

リグルド「あのー名前を付けていただいたのはありますがたいのですがリムル様の魔力が強大なのは存じておりますが一度にそんなになまえをあたえても大丈夫なものでしょうか」

綾音「名前を与えるのそんなに魔力消費するの？」

大賢者「種族や個体差はありますがこの量だともってあと数人です」

綾音「そつかなら明日にしよう」

次の日

全員名付け終わった

綾音「こんどは牙狼属だね」

綾音「まずボスの名前はヴォルフ」

ヴォルフ「ありがたき幸せ」

綾音「ボスの息子君はランガ」

ランガ「ランガ：ありがとうございます。」

とまあ全員名付け終わり

2日後

なんかみんな美女やマッチョになってた

綾音「????」

リグルド「名持になるということはすなわち格を上げ上位種になるということ」

綾音「ということはインフラ整備に拍車をかけることができるね」

近くの谷でヴォルフたちと気晴らしに行く

綾音「みんなすごい進化したね」

ヴォルフ「我らは牙狼ではなくテンペストウルフになりました」

その後みんなを集め法律を作ることにした

綾音「わたしはこの国の法律を作りたいと思います」

綾音「この大きさなら直接民主主義ができるね」

綾音「月一回程度法律を作るためのテンペストサミットをひらきます」

綾音「私の作った憲法に違反しない限りこの法律を守ることに」

綾音「憲法っていうのはこの国のおおもとの決まり事」

綾音「それをもとに法律っていう決まり事を決めることができる」

綾音「早速言っていくまああとで木に書くけど覚えておいてね」

綾音「憲法第1条殺戮、大量破壊、国を滅ぼす行為はテンペストサミットでテンペストが滅びる可能性がある」と判断された時以外一切禁止する」

綾音「第2条テンペストサミットは月に一度開催するものとする」

第2条第1項テンペストサミットは直接国民が参加すること

第2条第2項テンペストサミットでの決議は多数決で決めること

第2条第3項テンペストサミットで全会一致で可決した場合のみ憲法改正がで

きる」

綾音「第3条窃盗、強姦、差別などは一切禁止する」

綾音「第4条犯罪者は死刑、拷問、その他残酷な刑罰になることはない」

綾音「こんなかんじだね」

綾音「分かりやすく言うのと殺さない、壊れた時直すのに時間のかかる魔法、スキルは使わない、テンペストがなくなるようなことをしない」

綾音「テンペストサミットは全員で月に一度開催する。賛成反対の多い方で決まる、全員でいいと思った時だけこの憲法を変えられる」

綾音「ものを取ったり相手がいいと言つてないのに子作りしたらだめ他種族を見下さない」

綾音「悪いことしててもころしたりいじめたりすることしたらダメ」

綾音「これがテンペストの決まり事」

綾音「質問ある？」

リグル「なんで悪いことしてるのにいじめたらだめなんですか？」

綾音「いじめても憎しみしかうまないし罰としては意味がないから以上」

リグル「なるほど了解しました。」

ゴブタ「他種族を見下さないというのは？」

綾音「前世のクデツクの考え方なだけ見下したりすると相手もいやな気になつたりするしそれがもとで争いになったりはたまたま戦争になつたりするだからそういうのを未然に防ぐために憲法に入れた」

ゴブタ「わかりましたっす」

綾音「まあこんなかんじ」

綾音「なんか法律とかおもしろいと思ったらおしえてねテンペストサミットの時に話し合うから」

全員「はい」

綾音「あと村長リグルドはゴブリンロードに任命するゴブリンの長ね村の政治はまかせた」

リグルド「ははあつ、このリグルドこの身命をその役職を引き受けさせていただきませす」

綾音「よろしくね」

綾音（ここで法学部の知識が役に立つとは）

その後役割を与えたが警備班、調達班はいいんだが建築班がどうしてもついていけず手間取っていた

リグルド「お恥ずかしい限りです」

綾音「んーもう少し技術者が欲しいな私も技術職ではなかったしクデユックでも」

綾音「この世界にドワーフとかの技術に長けた種族っている？」

リグルド「まえに丁度ドワーフと取引をしたことがあります」

リグルド「彼らなら家の建築や衣服の作成などは知っているかと」

綾音「どこにいるの？」

リグルド「ドアルゴンです」

綾音「分かったさっそくいって来るね」

綾音「リグルド、留守の間任せねあとくれぐれも非常事態以外殺さないでね」

リグルド「はっお任せあれ」

綾音「いって来るね」

全員「いってらっしゃーい!!!」

ヴォルフに乗ってドアルゴンに行く

の2 ドアルゴンの技術

ドアルゴン

綾音「けっこう長い列出来てる、国境警備厳しいみたいね」

ゴブタ「中に入れば自由なんすけどね」

綾音「なるほどねー」

チンピラー「おいおい魔物がこんなところにいるぜえ」

チンピラー2「今なら殺してもいいんじゃないやね」

綾音「あなたたちには教育が足りないみたいですね。人に宣戦布告することの重みを」

ゴブタ「前来た時もボコボコにされたっす」

綾音「凶器の所持を確認とあと言動的に脅迫罪成立っつと」

綾音「あまり騒ぎ立てたくないからささっつとやるね」

ゴブタ「さすがリムル様」

綾音「麻酔弾でっつと」

麻酔弾をチンピラに射出と同時に眠ったがなぜか綾音たちも捕まった

牢屋

綾音「えーっとこれ薬事法とかで捕まったんですか？」

ドワーフ1「いやただの事情聴取だ」

綾音「ならよかったです」

ドワーフ1「まあ証言に矛盾はないしいいかもだと思われたんだろうな」

ドワーフ1「今回は君たちは」

ドワーフ2「大変だあー鉱山にアマサウルスが」

ドワーフ1「なんだと討伐隊は」

ドワーフ2「すでに向かいましたそれよりも魔鉱石の採掘に深くまで潜ってたガルドたちが大けがを」

ドワーフ1「回復薬は？」

ドワーフ2「戦争のための準備で不足してます」

綾音「人数は？」

ドワーフ1「お前にはかんけいのn」

たるいっばいのフルポーションを渡す

ドワーフ1「十分すぎるぞこれしかもなかなか手に入らない高純度のポーション!!」

ドワーフ1「助かったありがとう」

数時間後

ドワーフ3 「あんたが薬をくれたんだってなありがとよ」

綾音 「これってそんなに希少価値なんですか？」

ドワーフ1 「金貨10枚はくだらないもんよ」

綾音 「すごい」

ドワーフ4 「腕がちぎれかけて生きて帰っても仕事を失うところだったありがとよ」

ドワーフ5 「うううう」

綾音 「????」

ドワーフ1 「もちろん釈放だ」

休憩所

ドワーフ1 「礼と言っては何だが俺にできることがあれば言ってくれ」

綾音 「それなら技術者が欲しいです」

ドワーフ1 「そういうことなら腕のいい鍛冶師を紹介しよう」

綾音 「魔鉱石つかえば最強装備や永久機関に近いものがつくれそうね」

ドアルゴンを散策する

綾音 「文明レベルは産業革命後のイギリスくらいってところね」

カエデ「ですが魔鉱石や魔法で現代に近いものも結構ありますね」

綾音「出来れば抑止力に結構高威力か追尾制の兵器を着くんだね、ここだと物理法則無視したのはあるけど通常兵器だと弓矢や剣しかないもんね」

カエデ「そうですねですがあくまで殺傷しないやつでたとえば催眠爆弾やスタン系がいいのかもですね」

03 帰還

ドワーフの鍛冶部屋

カイジン「客人か少し待ってくれ」

綾音「お邪魔します」

ドワーフ「カイジン、俺の兄貴だ」

ガラム「カイジンさんこのスライムですよ俺たちにポジションくれたスライム」

カイジン「おおそうだったのかありがとう感謝する」

カイジン「それでなんの用で？」

カイジンに事情をはなす

カイジン「なるほど話はわかったがすまん今立て込んでてな」

カイジン「どこぞのバカ大臣が無理な注文してきてな」

カイジン「ロングソードを20本今週中に作れってな」

カイジン「まだ1本しか作ってないんだよ材料がなくなっつて」

綾音「材料あればどれくらいで出来ますか？」

カイジン「魔鉱石という特殊な鉱石が必要でなそれがあっても2週間はかかるがあと

5日で王に納品しなきゃいけないんだよ」

綾音「なるほど私と取引しませんか？」

カイジン「取引？」

綾音「ロングソードの20本量産の対価として技術指導をお願いします」

カイジン「それはいいが俺のロングソードを量産ってどうやるんだ？」

綾音「オリジナルを解析し同物資で生成しますただオリジナルには品質は劣りますが戦争には十分な精度にはなりません」

カイジン「なるほどな試してみるだけならいいかただオリジナルの剣は壊すなよ」

綾音「もちろんです」

ロングソードを解析しコピー吐き出す

カイジン「嘘だろ俺の作ったロングソードと全く同じじゃないか」

綾音「細部は違いますよ魔鉱石の純度や加工法の違いで少しですが耐久性がオリジナルよりはないです」

カイジン「でもこのクオリティなら全部納品できるぞ早速納品してくる」

カイジン、王に納品してくる

綾音「お祝い!？」

カイジン「リムルの旦那が来ないと始まらないぜ」

綾音「わかりました」

ガールズバー風の居酒屋

綾音「まあそうなるよね…」

綾音「つて元女の私から見ても綺麗な女の人多い…」

綾音「あーこういう魅力的な女性になりたかったな」

エルフ1「あーかわいいー」

エルフ2「もう私が先に目をつけてたんだからね」

綾音「あれまって私…」

エルフ3「ぼよんしてる気持ちー」

綾音「女の私でも気持ちい…」

ママさん「さあ飲みましょ」

カイジン「にしても恐れ入ったよあつという間に量産するなんてな」

綾音「オリジナルには敵いませんよ」

カイジン「正直に言うとおもうことはあるが次は真似出来ないものを作ってやるさ」

ママさん「スライムさん味わかるの？」

綾音「ええもう人工味蓄つけてあるので人間よりは劣りますが」

ママさん「すごいわね」

綾音「でも綺麗な人に会釈されて飲むお酒は美味しいですよ」

ママさん「まあお上手ねさあどうぞ」

綾音「ありがとうございます」

ベスターが入ってくる

ベスター「いいんですかこんなところでのんびりしていてカイジン殿」

カイジン「ベスター……」

ベスター「遊んでる場合ですかかな確かロングソードの納品の期限は……」

綾音「先程済ませてますよなんだったら宮殿の方に確認されては？」

ベスター「お、納めた!？」

ベスター「それよりもそれ、そのさつきからうるさいスライム」

ベスター「行けませんなーこの上品な店に下等な魔物など気分が悪くなる」

ベスター「魔物にはこうするのがお似合いだよ」

ベスターがビールを綾音にかける

エルフー「きや」

綾音「大丈夫？綺麗なドレスにかからなかった？」

エルフー「ええ大丈夫です」

するとカイジンがベスターを殴る

カイジン「ベスター!!お前俺の客に舐めたことしやがって覚悟できてんだろいな」
ベスター「私に対してこのような口を…」

綾音「ストロップ」

カイジン「？」

綾音「この法律は分からないのですが法律は細部や刑罰の大きい小さいはありそこはちゃんと裁判した方がいいのですがここは証拠を取り法廷で争いませよ」

カイジン「わかった」

ベスター「いいでしょう」

綾音「ママさん皆さんの証言を取って貰ってもいいですか？」

ママさん「ええ」

次の日法廷

騎士「ガゼルドアルゴン国王様の出場である」

裁判長「これより裁判を始める一同起立」

ドアルゴンでは弁護は代理人が当たるのだが弁護してないため綾音が

綾音「国王様発言よろしいでしょうか？」

ドアルゴン「ああいいぞ」

裁判長「こたえたよろしい」

綾音「先程からの弁護士が発言及びベスターの証言には矛盾が生じます」

綾音「証拠を提出したのですが却下された証拠品があるのですが再度提出してよろしいでしょうか」

ドアルゴン「見せてみる」

裁判長「提出してみよ」

ママさんが取った事情聴取を渡す

綾音「ママさんは私どもを庇う必要も無いしベスターも庇う必要も無いいわば第三者の観点によりこの証拠品は有効と思われませう。」

綾音「この証拠品によりますとベスターが先に私に対して暴言を吐きさらにお酒をかけた後カイジンがそれに怒り2発殴った」

綾音「ベスターの証言によりますと私たちがあとから入って来て暴行を加えたとなつてます」

ドアルゴン「それは本当か？」

綾音「さらにこのような本来私たちが弁護されるべきであるはずなのにベスターを擁護する発言しかしていないこれこそ買収の証拠では無いでしょうか」

綾音「ですがあくまで決めるのは国王様であり裁判長でありますので」

裁判長「主犯カイジンは強制労働20年に処す共犯者は強制労働10年に処す」

裁判長「これより裁判を閉廷」

ドアルゴン「待て久しいなカイジン息災か？」

裁判長「発言してよろしい」

カイジン「国王様に置かれましてもご健勝そうで何よりでございます」

ドアルゴン「カイジン、よの元に戻ってくる気はないか？」

カイジン「恐れながら王よ私は主を得ましたこの契は私の宝であります」

カイジン「たとえ王の命令であれど手放す気はございませぬ」

綾音（まっつてもまっつてもしかしてカイジン、ウチくるの!?!）

騎士「無礼な」

ドアルゴン「やめい」

騎士「ははっ」

ドアルゴン「判決を言い渡すカイジン及びその仲間、ベスターを国外追放とする以上である」

ドアルゴン「よの前から消えるがいい」

ドアルゴン「最後にベスター、大儀であった」

その後追放になってテンペストに戻る

◦ 4 村の成長

帰還後数週間後、カイジンたちがゴブリンに衣食住の技術を教え文化レベルが中世ヨーロッパレベルまで行った

綾音「技術指導がある程度終わったらくデュックの科学技術を教えようか」

カエデ「そうですね、まだこのレベルでは教えるのは早すぎます」

リグルド「リムル様」

綾音「なんかリムルっていうより綾音の方がしっくりくる」

綾音「今日から綾音でいい？」

リグルド「ええでは改めて綾音様、警備班より村から5kmはなれた位置に不審な人

間が4名確認しました」

綾音「第3種警戒態勢目標より500mはなれ警戒、わたしがコンタクトします」

リグルド「了解しました」

目標に近づくとジャアントアント（10mのアリ）に襲われてたので倒すのを手伝っ

た

旅人（ガバル、エレン、ギド、シズ）「スライム？」

綾音「スライムですが？」

ガバル「スライムがしゃべった」

エレン「信じられない」

綾音「人工声帯だからなんか違うんだよねー」

綾音「このお面黒髪の人のでしょ？どうぞ」

シズ「ありがとう」

宿泊施設

綾音「今日来た旅人は？」

リグルド「それがですね・・・」

3人でいい争いしてる声が聞こえる

綾音（つてこの人たちここ来る前に洞窟にいた人じゃん）

リグルド「大したもてなしできないがくつろいでただけてますかな？」

リグルド「改めて紹介しよう我が主リムルゲヴィター様です」

綾音「リムルですまあ前世の名前の綾音でよんでほしいな」

旅人全員「主!？」

綾音「ええそれより何しにここに来たのですか？」

ここで旅人メンバー全員が自己紹介をする

そしてブルムンド王国のギルドに調査してくるようにならされたらしい

綾音「国際的な手続きを取らずに勝手に建国してるんですが大丈夫ですか？」

ギド「そういうことはよく分かりますやせんののでギルドにきいてみましよう」

綾音「まあそうですねとにかくきょうはここでお休みください」

夕方、シズと綾音で話す

シズ「スライムさん日本から来たんでしょ」

綾音「ええですがかなり未来の世界ですが」

シズ「でも会えてよかった」

シズ「でもなんでこっちに？」

綾音「ミサイルが宿舎に当たって爆死そのあとすぐにここに転生って感じですよ」

シズ「スライムさんは転生者だったんだ大変だったね」

綾音「シズさんは違うんですか？」

シズ「わたしは召喚者だから」

綾音「そうなんですけどねシズさんはいつごろからここに」

シズ「ずっと昔、町は燃えて炎に包まれて空から爆弾が降ってきてお母さんと手を放

してしまつてその時……」

綾音「ごめんなさいいつらい思い出、思い出させてしまつて」

シズ「いいえ」

綾音「シズさんに面白いもの見せますね」

思念伝達で映像を見せる

歴史で習つた日本の戦後、戦後3度の大地震災、そこからの復興と転生してクデュック、ネルフ、ピースギアの世界を見せる

シズ「すごい」

綾音「戦争が終わつて経済は回復して大災害に見舞われたけどそれでもなお復興して平和な日本になりました」

綾音「その後転生した時に行ったクデュックのような誰も殺さない国を作つていきたいそう思い建国しました。」

シズ「素敵そうなるといいね」

するとシズが苦しみだす

綾音「大丈夫!?!」

シズ「ええたぶん」

綾音「きようは疲れたと思うからゆっくり休んでくださいね」

綾音「また明日」

シズ「ええまた」
するとカイジンが区画について会議した

05 爆炎の支配者

朝

綾音 「ここは気に入ってもらえましたか？」

シズ 「ええとつてもあと私には敬語使わなくてもいいよ」

綾音 「分かった」

綾音 「そういえば旅の目的ってまだ聞いてないよね？」

シズ 「旅の目的は私を召喚した人に会いに行くの」

綾音 「うんうん」

シズ 「…」

綾音 「分かったまた旅の帰り道にでもよつてよ」

シズ 「うん」

しばらくして旅立つ準備が終わりお見送りの時にシズが苦しみ出して爆発後シズさんが炎に包まれてさらにイフリートになった

綾音 「第一戦闘配置及び非戦闘員は地下シェルターへ」

リグルド 「了解しました」

テント及び木造建築に火をつける

綾音「イフリート、宣戦布告ということでもいいですね」

イフリート「……」

綾音「種族は炎かということは二酸化炭素か泡消火の窒息効果、冷却が有効ね」
するとイフリートが分身を円状に召喚する

綾音「冷凍マシンガン出せる？」

大賢者「氷魔法を使用した冷凍マシンガンを使用しますか？」

綾音「ええ」

分身に連射して本体のみになる

すると綾音が炎に包まれるがダメージがゼロ

炎を利用イフリートを捕食、シズと分離させたそれと同時に解析して炎系魔法が使えるようになった

次の日の朝

テンペストホテル

シズ「ねえスライムさん聞いてくれるかな？」

綾音「うん」

シズ「私のような人がいたこと」覚えていてほしい」

綾音「分かったよ」

シズさんにいろいろ聞いた

召喚させられてイフリートを憑依させられたこと、友達を殺めてしまったこと

シズ「私は魔王の側近として使え続けた」

シズ「でも出会えたの勇者に」

綾音「うん」

シズ「戦いがあつて魔王は城を捨てて私を殿として残した」

シズ「そして勇者と戦った」

シズ「殺されると思つたでも話しかけてきてどうしてここにいるのかどうやって生きてきたのか」

シズ「魔人の私の話を信じてくれて」

綾音「うんうん」

シズ「魔法抵抗を高めてイフリートを抑え込めるって」

シズ「彼女と共に旅をしてこの世界のことや魔法を教わって」

シズ「仮面の力である程度なら使えるようになって」

シズ「誰かを助けて戦って」

綾音「そっかそっかシズさんかっこよかったよ」

シズ「彼女と一種に旅をして幸せだったな」

シズ「でもあの人は姿を消した私を残して」

綾音「なんで？」

シズ「どうしてだろう分からない……」

シズ「きつと会えるそう言ってる」

シズ「私は強くなろうと決心した苦しんでいる人を助けようって」

シズ「結構頑張ったんだ」

綾音「うんうん、私には想像しかできないけど辛かったと思う」

綾音「シズさんはよく頑張ったと思うよ」

綾音、シズの頭をなでる

綾音「ごめんねほら体スライムだからさ抱きしめてあげられないからこれしかできないけど」

シズ「それでもうれしいよ」

シズ「私ももう若くなくてイフリートの制御も効きにくくなってきて」

シズ「一歩間違えればイフリートを解き放つかもしれない」

シズ「このままだとまた大切な人を」

シズ「だから引退して学校の先生になった」

綾音 「この世界にも学校があるんだね」

シズ 「うんイングラシア王国っていうところで異世界から来た子たちの」

綾音 「そうなんだけっこういるんだ転生者」

シズ 「そうだよ」

シズ 「楽しかったな平和で」

シズ 「私の元を去った子もいたけど」

シズ 「グランドマスターになった子もいて」

綾音 「すごいね」

シズ 「寿命が残りわずかみたいでイフリートを抑え込めなくなってきた」

シズ 「思い出しことあったから旅に出ようと思って」

シズ 「私を召喚した男を探して」

綾音 「復讐したいの？」

シズ 「分からないでも会って確かめたいと思ったの」

シズ 「だから私は…」

シズ 「本当にいい子たちちよつと危なっかしいけど」

シズ 「楽しかったでももう…」

シズ 「ねえスライムさん名前はなんていうの？」

綾音「綾音、茨波綾音まあでもこっちではリムル・ゲヴィターだけどね」

シズ「私はシズエ、井沢静江」

綾音「もうそろそろ寝よう？」

シズ「綾音さん、お願いあるけど聞いてくれる？」

綾音「うん」

シズ「私を食べて」

綾音「!?」

シズ「私にかかった呪い食べてくれた時みたいに」

シズ「嬉しかったこの世界が嫌いでも憎めない」

シズ「まるであの男のよう」

シズ「だからこの世界に取り込まれたくない」

シズ「最後のお願ひ君の中で眠らせて」

綾音「わかった：： ホントはすぐにでもシズさんを治してもっとお話したかったけど」

綾音「会いたかった男の名前は？」

シズ「レオン・クロムウエル」

綾音「そっか」

シズ「最強の魔王の1人」

シズ「私の存在を認めさせたかっただけかも」

シズ「もしあの子たちが救われて元の世界に戻れるなら」

綾音「わかったクデュックの科学技術で何とかしてみせる!!!」

綾音「そしてレオン・クロムウエルにシズさんの思い届けるよ」

シズ「ありがとう」

その後シズさんは動かなくなり捕食者を使って取り込んだ

◯ 6 別れ

綾音「シズさんがシズさんが…」

綾音はシズの死を悔やみ泣いていた

ガバル「逝っちまったのか」

ギド「本当に綾音さんなんでやんすか」

リグルド「間違いありません綾音様です」

エレン「シズさんを食べたの？イフリートみたいに」

綾音「私は治してあげるつもりだった回復薬とかで」

綾音「でもシズさんが食べてほしかったみたいでそういう形での葬送にしてあげたの」

綾音「でも仲間のみんなに相談できなかったのはごめんなさい」

ガバル「シズさんがそう望んだのであれば仕方ない」

綾音「ごめんねエレン割り切れないかもしれないけど」

エレン「うん、ただ最後のお別れの言葉はしたかったな」

綾音「危なっかしいところもあるけどみんなとの旅は楽しかったみたいだね」

ガバル「危なっかしいね…」

そこからまた口げんかが始まる

次の日の朝

ガバル「そろそろおいとまするよ」

綾音「そつかまた今度近くに寄ってね」

ギド「そうでやんすねそれではまた」

ガバル「最後にお問い合わせあるんだけどいいか？」

綾音「うん」

ガバル「もう一度人の姿になってほしいんだけど」

綾音「わかった」

人型になる

旅人全員「シズさん、お世話になりました。」

ガバル「おれあなたに心配されないようになりーダーになります」

ギド「あなたと冒険できたこと生涯の宝にしやす」

エレン「ありがとう」

綾音に抱き着く

エレン「お姉ちゃん見たいてって思っていました」

エレン大泣きする

綾音（よかったねシズさん）

綾音「そうだここきたついでに装備品新調してかない？」

全員に装備品を渡す

ガバル「うわーあこがれのスケールメール」

ギド「いいんですかいあつしにはもつたいない作品しかも牙狼の毛皮まで使用されます」

エレン「このローブなんですかかると頑丈だし綺麗」

綾音「うちの職人の力作ぞろいだからね」

綾音「でもまだまだ進化するよー」

綾音「ここでこの装備の作者さんの登場です」

綾音「おーい」

カイジン「へっへっへっへ力作といっても試作品だがな」

ドルド「着心地はどうだい？」

ガラム「細工は流々つてもんよ」

ミルド「うんうん」

綾音「カイジンにガラム、ミルドにドルドだ」

ガバル「カイジン!?まじで!!!」

エレン「腕利きで超有名のあのカイジンさん？」

ガバル「それにガルム、ミルドにドルドってあの有名なドワーフ3兄弟!?!」

ガバル「家宝にしますありがとうございます!!!!」

エレン「嬉しいですよー」

ギド「夢のようでやんすー」

綾音（すごいなあカイジンたちの仕事）

その後ガバル一行は元の国に戻った

しばらくしてシズさんのお墓を作って弔った

綾音（シズさん待っててね必ずレオン・クロムウエルに遺志を伝えてみせる）

◯ 7 鬼

数週間後

資料調達していたリグルドから救援要請がきたので駆け付けた

するとランガやヴォルフが6人のオーガと戦闘しているが歯が立たない

フルポーションを味方に配布した後全員を避難させテンペストには第一種戦闘態勢を引いてもらった

この数週間に近代兵器を開発させた

催眠ガス爆弾、レールガン式ICBM（電気魔法の技術で小型化に成功し戦車サイズにした）

近距離兵器は麻酔弾、ゴム弾を使用するマシンガン及びライフル、スタングレネード
催眠グレネード、など

綾音（さてとこの状況なら交戦権使うかそれとも交渉するか…でもショーコさんなら交渉するな）

綾音「うちのものがご迷惑をお掛けしました。交渉してもらえませんか？」

綾音（にしても無力化かいいセンスだなあ）

赤いオーガ「正体を現せ邪悪な魔人め」

綾音「邪悪な魔人？」

赤いオーガ「魔物を使役するとは普通の人間にできる芸当ではあるまい」

赤いオーガ「見た目を偽りオーラを抑えてるようだがあまいわ!!」

白髪の老いたオーガ「正体を表すがいい」

青のオーガ「黒幕から出向いてくれるとは好都合というもの」

綾音「私は……」

赤いオーガ「貴様の話など聞く耳を持たんすべてをその仮面が物語っている」

綾音「勘違いしてませんか？これはシズさんの形見で」

赤いオーガ「同法の無念その奥分の意地でも貴様のクビで上がらしてもらおう」

赤いオーガ「邪悪なる豚どもの仲間め」

綾音「これは交渉決裂か」

綾音「ただ交戦はするが非殺傷で行かせてもらいます」

まずハンマーもったオーガを催眠グレネードで眠らせて青い女性オーガを拘束青いオーガをスタングレネードで気絶させる

桃色の女性オーガ「あんなに簡単に」

綾音「残りの戦力では戦闘続行不可能に思われますが戦闘続行しますか？」

赤いオーガ「黙れ邪悪な魔人め」

赤いオーガ「やはり貴様は奴らの仲間だたかがオークごときに我らオーガが負けるはずない」

綾音「これは別案件ありそうね」

すると白髪の老いたオーガが切りかかってくるがかわす

白髪の老いたオーガ「わしももうろくしたものを」

白髪の老いたオーガ「首を刎ねたとおもったのだが」

赤いオーガが日本刀に炎をまとわせて攻撃するが無効化

赤いオーガ「なに!？」

綾音「さてとスキル使いますか」

綾音はイフリートの炎系スキルと黒稲妻を統合した黒炎とその流れで黒稲妻を威嚇

射撃する

桃色のオーガがさらに止めてくれたおかげで停戦した

その後赤いオーガが謝罪しテンペストに案内し宴会を開いて仲間になった

話を聞くとオークの裏に仮面の魔人がいると聞き作戦を練る

ø 8 ガビル

次の日

綾音「新しく仲間になった記念に名前をあげるね」

赤いオーガ「わかったありがたいがたく頂戴する」

なぜかその瞬間に気を失い目覚めると青いオーガの膝の上に寝転がってる

綾音「えっと若さんだよね？」

紅丸「はいいまは頂戴した名で進化し鬼人となり紅丸を名乗っております」

※赤い鬼人

朱菜「綾音様、朱菜です」

※桃色の女性鬼人

朱菜「お目覚めになられて本当に良かった」

紫苑「紫苑です綾音様につけてもらった名前とても気に入ってます」

※青い鬼人

綾音「紅丸の後ろが」

白老「白狼ですぞ改めてよろしく頼もう」

※白髪の老いた鬼人

綾音「紅丸の隣が」

蒼影「蒼影の名を賜りました、ご回復お喜び申し上げます」

するとその辺にいるおじさんみたいな感じの鬼人が入ってくる

黒兵衛「綾音様が目覚めたただべか」

黒兵衛「綾音様元気になってよかったですよ」

黒兵衛「わかっかなおらは黒兵衛だ」

数日後白老がゴブタに剣術指導してるのをみていると突然蒼影からリザードマンの軍の接近を報告されて検問所に駆け付けた

綾音「さてと」

するとリザードマンが検問所に来る

その後リーダー格が派手な登場で来る

ガビル「吾輩はリザードマンのガビルである」

ガビル「お前らも配下に加えてやろう光荣に思え」

紫苑がキレかかっている

綾音「配下？侵略目的ですか？」

ガビル「貧弱なお前から守ってやる」

綾音「あのーこの装備と国境警備見てもそれ言いますか？」

紅丸がキレて

紅丸「こいつ殺していいですか？」

と満面の笑みで聞いてきた

綾音「無力化で…つてまってやめとこう策はある」

ガビル「牙狼属を飼いならしたものがおると聞いたのだがそいつは幹部に引き立ててやろう」

綾音「飼いならすというよりも仲間ですね」

ガビル「スライムが？冗談を言う出ない」

綾音「ヴォルフ、ランガこいつがようあるらしいよ」

ヴォルフ、ランガ「御意！」

ガビル「貴殿たちが牙狼属の族長とご子息かな」

ガビル「美しい毛並み、鋭い眼光さすが威風堂々たるたたずまい」

ガビル「しかし主がスライムとは拍子抜けですな」

ガビル「どうやら貴殿たちはd」

ヴォルフ「それ以上は許さん」

ランガ「トカゲ風情が我が主を愚弄するとは」

ゴブタ「デデデーン、デデデーン」

綾音「そうだゴブタに戦わせよう」

ゴブタ「俺っすか？」

綾音「うん」

綾音「ガビル、模擬線を申し込む」

ガビル「模擬戦かよかろう受けて立つ」

綾音「ゴブタを倒せたらその要望は考えましょう」

綾音「フィールド、およびルールはこちらで設定させていただきます」

ガビル「よかろう」

仮設フィールドを建設する

綾音「この中で戦ってもらいます使用武器はこの模擬専用非殺傷ナイフ、太刀、槍で時間が10分」

綾音「刃先についている塗料をつけるか戦闘不能にさせてください」

綾音「攻撃魔法は禁止でおねがいします」

ガビル「わかった」

綾音「勝ったらゴブタ君にはオリジナル特殊装備をカイジンに作ってもらおうね」

綾音「負けたらいつもの特訓倍増ね」

ガビル「分かったっす」

綾音「レディー……ナイフアイト」

まずゴブタが槍を投げ怯んでる隙に影移動しナイフで首に塗料をつける

綾音「そこまで勝者ゴブタ」

ゴブタを胴上げする

綾音「ガビル、共闘に関してはいいですが傘下に入るのはお断りします」

綾音「今日はお引き取りください」

ガビルの軍は撤退した

◯ 9 新体制テンペストサミット

テンペストサミット

(様式を変更してリグルドと鬼人、カイジンのみになった)

蒼影 「20万のオークその本隊が大河に沿い北上している」

蒼影 「本隊と別働隊の動きを見て予測される合流地点はここより東の湿地帯」

綾音 「それってさっき来たリザードマンの」

蒼影 「支配地域です」

綾音 「20万か数的に結構な数だね」

カイジン 「オークは元々知能の高いまものじゃねえ」

カイジン 「この侵攻に本能以外の目的があるとするとバックの存在がありそうだな」

綾音 「ボスがいるとしたら今までの戦法上そこをたたけば解決できるけど」

綾音 「ボスと想ってたのがじつは中堅でみたいなことなら長引く可能性あるね」

紅丸 「最低でもオークロードは出現した可能性は高いと思う」

綾音 「オークを統制する数百年に一度のユニークモンスターだよね」

紅丸 「ええ20万の軍勢を統率できるのはオークロード以外かんがえられませんの

で

蒼影「綾音様に取り次いで欲しいと申されてる方が文身体に接触してきました」

蒼影「えつと相手は大変珍しくドライアドなのです」

綾音「わかったお呼びしてくれる？」

蒼影「はっ!!」

トレイニー「魔物を統べるもの及びその儒者の皆様突然の訪問すいません」

トレイニー「わたくしはドライアドのトレイニーと申します」

トレイニー「以後お見知りおきを」

綾音「私はリムル・ゲヴィターでもできれば綾音つて呼んでほしいです」

綾音「よろしくお願いします。トレイニーさん」

綾音「それで今回はどのようなご用件で？」

トレイニー「あるお願いをしに来ました」

トレイニー「綾音さんあなたにオークロードの討伐を依頼したいのです」

綾音「自分としてはいいですよ」

綾音「ただのオークロードではなさそうですし」

トレイニー「ありがとうございます」

綾音「ただ国のシステム上非常事態ではないため国民投票させていただきますけどいい

いですか?」

トレイニー「ええ」

次の日トレイニーに詳細を聞きそれをもとに国民投票でオークロード討伐が賛成多数で可決

さらに蒼影がリザードマンの首領にはなしをつけにいつてくれた

湿地帯にて

戦闘メンバー

- ・ 紅丸
- ・ 紫苑
- ・ 白老
- ・ 蒼影
- ・ ヴォルフ
- ・ ランガ
- ・ ゴブリンの戦闘班
- ・ 義体を手に入れたのでカエデ

綾音「僧院戦闘態勢目標蒼影と交戦中のオーク」

全員「了解」

その後蒼影と合流し要救助者にフルポジションをかけて回復させた

その要救助者はガビルの妹で話によるとガビルが謀反を起こしたらしい

そして同盟を結んで蒼影が首領を救出その間に進軍する

◊ 10

悪食

ガビルがオークにやられてた

鬼人たちが効か爆弾並みの爆発を起こす

ランガがデスストームをだす

そしてオークロードを見つける

そのとき突然謎のペストマスクつけて白い恰好の男が高速で降りてくる

ゲルミュット「どういうことだこのゲルミュット様の計画を台無しにしやがって」

綾音「1つ聞きたいことがあります」

ゲルミュット「お前なんかにこたえることなんてないわ!!!」

綾音「この計画はあなたが志望したということとで間違いないですね」

ゲルミュット「あたりまえだろ」

とその時オークロードに首を刎ねられゲルミュットが死亡オークロードがゲルミュットだったものを捕食オークデイダスターへ進化した

綾音「皆行くよ」

全員「はい」

鬼人の総攻撃を受けても回復を繰り返しちが明かない

綾音「最終手段を使用」

綾音「カエデ、捕食者の使用許諾確認」

カエデ「承認します」

大賢者「捕食者を使用します」

するとオークデイダスターを飲み込んだ

オークデイダスター消失、オークロードの侵攻停止オークの残党を仲間にした

その後ジュラの大森林全体の会議をテンペストで開始

トレイニー「それでは議長の方波綾音始めてください」

綾音「はい、まず初めに私の意見を致しますのでそれについて質問意見要望をお聞か

せください」

綾音「またここで結ばれた条約、議事録の詳細などは後日改めて書面化致しますので

お確かめください」

綾音「さて本題に入らせていただきます」

綾音「今回の議題はお分かりのとおりオークの今後の対応についてです」

綾音「私としてはオークは心神衰弱であり通常の判断は不可能であったためゲル

ミュットに利用されオークロードへの進化を誘発、そこでの意識の有無は不明ではある

が結果として多くの他種族への侵攻に至ったと思われます」

綾音「またその計画者はオークロードが処刑したため罪はなくなつたと判断します」

綾音「ですがそれでは被害を受けた種族が納得いかないなので私の国で強制労働をさせたいと思ひます」

綾音「もちろんオークへの休息も与えます」

綾音「あと強制労働といつても各々の特性やスキルなどを考慮して判断します」

綾音「このような処罰を検討しておりますがいかがでしょうか？」

紅丸「文句はありますがもうあのような無様はお見せしませんよ」

質問などはなく受け入れる種族が多かつたあとオークはめちやめちや感謝してた

綾音「今回一種族で解決策がなく孤立してしまつたゆゑにこういうことが起こつたと私は思ひます」

綾音「ですので他種族での協力をしていきたいとおもうのですまあもちろん差別やいじめなども出てくることかと思ひますがそこは私どもの国や条約にてそういうことを減らしていきたいと思ひます」

綾音「具体的にはリザードマンから水源や兵力、ゴブリンは土地の提供を私どもの国は加工品や魔具、兵器や技術などを提供します」

綾音「まあ欲を言えば他種族国家とかいいなと思うしくデュックがそういう感じだつ

たからやりたいけどまあリザードマンやゴブリンたちの利権もあるしまあまださきかなとは思ってます」

その後各種族合同の条約を締結不可侵及び自由貿易、また安保理を結んだあとなついでになぜかトレイニーさんに盟主にさせられた：

◊ 11 国の拡大

オーク全員に名前つけした（10日間もかかった）

カエデいるから全員覚えてられるけどそうじゃなかったら到底覚えきれん数…

あとガビルたちがリザードマンの国から追い出されてなぜかこっちに来た

3か月後オークをなずけたことでハイオークになりカイジンたちの指導で技術者として働いている

国の国土が大きくなり防衛装置の拡大及び地下シエルターの拡大化も避けられないため地下都市建造も同時並行でしていたまたミサイルポットなどの対空対地防衛システムも多く導入していた

綾音「予想よりも早く大都市にできそうだね」

カエデ「そうですね今の人口比率からしても中規模都市くらいなのでこのまま人口が増えればそうなりますね」

綾音「あとは兵装ビルと大規模ビルと貨幣システムかあー」

綾音「悩ましいね現金かオンラインシステム作って仮想通貨にするか」

カエデ「仮想通貨の方が管理が楽でいいと思いますよ私も管理できますし」

綾音「そうねなら仮想通貨にしましょう」

つと蒼影が連絡に来る

蒼影「綾音様、緊急事態です」

蒼影「ペガサスの軍勢1000です」

綾音「第1種戦闘態勢のまま待機また対空砲の使用も許可があるまで使用不可また鬼人特殊部隊の出動命令また非戦闘員は地下都市にて待機」

蒼影「はっ」

アナウンス「第1種戦闘態勢が発令されました非戦闘員は速やかにE4エリア大型エレベーターにて地下に避難してください繰り返します非戦闘員はE4エリア大型エレベーターにて地下に避難してください」

軍の識別完了ドアルゴン軍

と国王ドアルゴンがおりてくる

ドアルゴン「スライムか」

綾音「スライムっていうのやめてもらっていいですか？」

綾音「わたしはリムル・ゲヴィターです」

綾音「ジュラの大森林盟主でありテンペストの国王です」

綾音「あとこっちの方がイメージに近いと思うのでこちらの恰好させていただきま

す」

するとシズさんそっくりに擬態する

綾音「今回これだけの戦力集めてどうされました？」

ドアルゴン「単刀直入にいうリムル貴様を見極めに来た」

ドアルゴン「俺の剣で貴様の本性見極めてくれるわ」

ドアルゴン「この森の盟主などとほらをふいている貴様には分というものを教えてやらねばならん」

綾音「これは決闘の申し込みととらえていいですね」

ドアルゴン「そうだその件が飾りでないなら俺の申し出を受けるがいい」

綾音「いいですよさすがに殺さないようにしなければならいのでこちらはそちらの剣をふせいだら勝でよろしいですか」

ドアルゴン「うむ」

ø 12 同盟

ドアルゴンとの戦いが開始される（立会人はドライアド）

まずは綾音が仕掛けて切りつける

がドアルゴンに防がれカウンターをかけてきそうになるから回避

次にドアルゴンが仕掛けてくる

ドアルゴン「臙・地天轟雷」

綾音は受け止める

ドアルゴン「あっはははは」

ドアルゴン「俺の剣を受け止めおったわ」

ドライアド「そこまで勝者リムル・ゲヴィター」

ドアルゴン「剣を交えてよく分かったおまえは邪悪な存在ではない」

ドアルゴン「しかしよく俺の臙・地天轟雷を受け止めたな」

ドアルゴン「見事だったぞリムル」

綾音「いやよく戦術指導されてる師匠に打ちのめされてるだけです」

ドアルゴン「まさかその師匠というのは」

白老 「みごとでした綾音様」

ドアルゴン 「綾音？」

綾音 「まああだ名のようなものです」

ドアルゴン 「なるほど名前的には『日本人』という異世界人のような感じだな」

綾音 「ええそんなところですよ」

そのあと白老とドアルゴンの世間話が続いた

夜国實用ホテル

綾音 「なるほどオークロードの討伐をした魔物集団の調査だったんですね」

ドアルゴン 「ああ敵味方を見極めにな」

ドアルゴン 「それよりあの時のスライムがこれだけの国を作っていたとは」

ドアルゴン 「さらにいうと自由貿易連盟にも劣らない技術を持つてるとはな」

綾音 「いえいえわたしは技術を教えてるだけです仕事のほとんどはカイジンさんたちがほとんどやってます」

ドアルゴン 「王はそれぐらいがいいあまり仕事をやりすぎると政治にも響くし威厳もなくなる」

綾音 「そうですね」

ドアルゴン 「綾音よ我が国と盟約を結ぶ気はあるか？」

ドアルゴン「これだけの広大な土地を支柱に収めれば我が国以上の富と資金が手に
入る」

ドアルゴン「その際に後ろ盾となる国があると便利だぞ」

綾音「いいですけどそういうことになれば反魔物派の国とかが宣戦布告してきたりとか
になりませんかね？」

ドアルゴン「そうなることは想定済みだ」

ドアルゴン「ただ我が国にもメリットはある」

綾音「そうですね後日正式発表する機会を作ります」

ドアルゴン「それでおぬしらの国は何とこの国は？」

綾音「クデュック連合王国です」

リグルド「おーさすが綾音さまこの国はクデュック連合王国この町はリムルといたし
ましょう」

リグルド「中央都市リムルです」

紫苑「おー中央都市リムルこれ以外ないですね」

紅丸「うむこのまちにふさわしい名だ」

ドアルゴン「決まりのようだな」

綾音「これからよろしくお願いします」

綾音
「

ø 13 天災？

なぜか数日後、ドアルゴンがやってきて明らかに人型のものを持ってきた

綾音「なんですかこれ？」

ドアルゴン「なに、のあかしだ受け取れ」

綾音「ええ」

袋を開けるとベスターが入ってた

カイジン「ベスターじゃないか」

ドアルゴン「有能なこいつを遊ばせるのはもつたいたないが俺に使えさせるわけにはいかないからな」

ドアルゴン「好きに使え」

綾音「ありがとうございます。ちょうど研究開発者がたりなくてこまってたんです」

ベスター「王よ今度こそご期待に添えるよう精進いたします」

ベスター「こないだはすまなかつた許されるならここではたらかせてほしい」

綾音「ええもちろんベスター、月金貨4枚、新技術開発で+2枚でいい？」

ベスター「そんな大金いいんですか？」

綾音「お金の錬金術はカエデが得意だからねあとこれからお得意先ができそうだから」

綾音「よろしくね」

ベスター「ははあ精一杯務めさせていただきます」

ドアルゴン「ではさらばだ」

綾音「また今度ー」

そのあとガビルたちも仲間になったので戦闘班には遺族専用スーツ及びパワーダスーツを与えた

ガビル「なんですかこれ？」

綾音「えつと身体能力の機能をアップさせるスーツと装備」

綾音「まあほんとは魔法装備でもいいんだけどこれはどんな剣、武器にも対応する」と目的として作ったやつでしかも今回、専用に沼地特化型にしてあるみたい」

ガビル「ありがとうございます」

ついでにガビルの部下にも名前上げてドラゴニユートになった

あと蒼影偵察班にはスニーキングスーツ及び専用の小型銃、短刀を用意した

ついでにまだ作ってなかった農業用ビルを地下に建設戦闘配置時の長期化でも食料の確保ができるようになった

ベスターは薬学が得意だったらしくポーションや薬草を利用した催眠ガス兵器の開発に回った

すると超音速で飛行する物体をレーダーで捕捉した

綾音「予想到達時刻15分後第一種戦闘配置、対空迎撃開始、非戦闘員避難開始」

戦闘班「早すぎてロックできません」

綾音「私を狙ってる可能性ある郊外に出るから非常時は合図するからミサイル撃てるようにしてて」

戦闘班「わかりました」

郊外に出てた瞬間飛行物体が着弾

すると着弾地点から女の子が出てくる

ミリム「初めまして私はただ一人のドラゴノイドにしてデストロイの二つ名を持つミリム・ナーヴァなのだぞー」

綾音「魔王？」

ミリム「お前が一番強そうだったのであいさつにきてやったのだぞー」

綾音「早速知り合ってばかりなところ悪いんだけど装甲版第1層から20層一部損壊してるんだけど・・・」

ミリム「それはすまなかつたんだぞー」

綾音「できればこのエリア周辺で暴れないでほしいけどまあ人的被害出さなきゃいいかな」

ミリム「できるだけそうするんだぞー」

綾音「て、まって紫苑攻撃しないで」

紫苑「待てません」

ミリム「ほう我と遊びないのか」

綾音「蒼影、街を耐核モードに」

蒼影「はっ」

ミリム「何なのだこの町は」

綾音「まあ未来の技術というやつです」

014 ミリム

綾音「待てよこういう時は…」

綾音「全員ポーシヨン飲んで寝てて」

綾音「秘策がある」

紫苑「わかりました」

綾音「これをくらええええ」

綾音はお菓子を放り込む

ミリム「なんなのだ？これこんなにおいしいものいままですべたことないのだ」

ミリム、子供が初めて食べるお菓子を食べたときみたいな反応をする

※アリア時代に買って食べてた綾音の好物のクッキー入りチョコレートを再現した
もの

綾音「ミリムさんいやミリムちゃん？」

ミリム「へ？」

綾音「私の勝ちならもつとおいしいお菓子あげるよおー」

ミリム「ほしいー」

ミリム「だけど負けてくれないなあ」

綾音「あれれ？いいのかな？早く認めないとなくなっちゃうよお？」

ミリム「わわかった今回は引き分け引き分けでどうだ？」

ミリム「今回の剣はすべて不問にするのだ」

綾音「うんうん」

ミリム「あとあと今後一切私が手出ししないと誓おうではないか」

綾音「いいよはいこれ」

ミリム「おー」

今度はシュークリームをあげる

綾音「よしよしいいこいいこ」

ミリム「なあなあお前は魔王になろうとしようとしないのか？」

綾音「魔王よりもこの国の発展に力を入れたいし人間と敵対する可能性あるからね」

ミリム「でも魔王だぞ」

ミリム「かつこいいとか憧れたりしないのか？」

綾音「たしかに魔族間の統率力はいいけどねえ」

綾音「それ以外の手段がないときを除いてはしないかな？」

ミリム「そっか」

ミリム「あつきては魔王になるよりも楽しい事してるな？」

綾音「まあ楽しいといえれば楽しいかな？」

ミリム「ずるいぞずるいのだもう怒ったぞー仲間に入れるのだ」

綾音はもみくちやにされた

綾音「えつとわたしは戦いよりも平和を望んでるし何より平凡な世の中にこそ楽しいことはあると思ってる」

綾音「だからあえて戦争の火種を作ったりすることはしないね」

ミリム「そうなのか」

綾音「だから私の国でなにも争いをしたり壊さないって約束できるなら一緒に暮らす？」

ミリム「たのしそうなのだあ」

綾音「きまりだね」

綾音「わたしのことは綾音って呼んでねわたしはミリムって呼ぶから」

ミリム「わかったのだ」

ミリム「ただ特別なのだ本当は呼び捨てでいいのは仲間の魔王だけなのだ」

綾音「わかったよよろしくねミリム」

ミリム「よろしくなのだ」

綾音「蒼影、リグルドに新しくミリム用の防爆の部屋と広場の建設を頼んで」

蒼影「ははっ」

綾音「ミリム、さすがに全く壊してはいけなくなってなったらストレスたまるだろうから数日後に家建ててあげるからそこでなら町を壊さないレベルなら爆発魔法使っていよ」

ミリム「いいのか？」

綾音「さすがに最大出力ではやらないでね」

ミリム「分かってるのだ」

ø 15 争い

その後案内がてらミリムを住人に紹介した

そして夜国賓用ホテル内露天風呂

ミリム「ぷはぁーなんだこれはーすっごく気持ちがいいのだー」

綾音「温泉、マグマの熱で暖められたお湯を使ったりラックス施設」

ミリム「すごいのだーおよげるのだー」

朱菜「お風呂で泳いではいけません」

紫苑「えっ」

朱菜「だめですよ」

そのご臨時クデュックサミットでミリムの相手は綾音がすることになった
ベスターのとこに行き回復薬の量産化に成功

すると爆発がある

綾音「たぶんミリムだと思うけど念のため発電施設近いから確認して」

蒼影「こんかいの爆発での影響ありません」

綾音「よかった人的被害は？」

蒼影「なしです」

綾音「いちおう現場に行くね」

綾音「蒼影、何があつたの？」

蒼影「新たな客人が来てそれに対しミリム様が激怒して爆破魔法を使用しました」

綾音「分かつた」

爆心地に行く

するとリグルドが倒れてる

綾音「大丈夫？ ゆっくり休んで」

リグルド「ありがとうございます」

カエデ「町の防犯カメラ映像を参照しますか？」

綾音「うん」

そこにはいい争いをしてリグルドにけがをさせた客人に切れて吹っ飛ばすミリムが
ミリム「こやつがふざけた真似をしたからお仕置きしといたのだ」

綾音「いい？ お仕置きしてくれたのはうれしいけど爆破魔法は禁止周りにも被害出る
しオークたちが一生懸命作ってくれた建物や道路を壊してしまうからね」

綾音「今回巻き込まれた人がいなかったからいいけど国内では特に爆破魔法は禁止ね
まもれなかつたらごはん抜きね」

ミリム「それは嫌なのだ」

綾音「それならまもることね」

綾音（ショーコさんいればすんなりいくんだけどなあー）

その後事情聴取のために客人を移送した

綾音「何しに来た？まさかりグルド殴って終わりってわけではないよね」

客人（フオビオ）「下等なスライム風情にこの俺が答えるのも？」

綾音「あの一この魔素でもそんなこと言えるんでしようか？」

綾音「魔王カリオンを知らないしあなたの態度でカリオンと私どもと敵対する可能性はあるんですがそれでもなおこの態度をとるのですか？」

フオビオ「偉そうにこの町はこんな下等な魔物に従うのか？」

フオビオ「雑魚ばかりで大変だなミリム様に気に入られてるからって調子にのるなよ？」

綾音「そこまで言うのならコロシム行きますか？もちろん非殺傷ではありませんけど」

綾音「つていう冗談は置いて返答次第で本当に戦争状態になる可能性もあるのでよく考えてへんとうするようにお願い致します。」

フオビオ「つちジユラの大森林を支配してる謎の魔人をスカウトするよういわれてき

たんだ」

綾音「話は分かりましたでは今回はお引き取り願います」

紅丸「よろしいのですか？」

綾音「ええまあたしかにリグルドが攻撃されたので宣戦布告と行きたいところではあるがわたしは平和的に解決させたいので交渉したい」

綾音「カリオンへ交渉をする場合日時を改めて連絡くださいあと戦争するときには覚悟してくださいと伝えてください」

フオビオ「きつと後悔させてやる」

フオビオ一行はカリオンのもとへ帰った

ø 16 新たなる問題

ミリムから新兵器の開発に引き換えに魔王のことについて聞いた

魔王カリオンを中心に新しく魔王種の誕生を計画綾音が阻止してしまったというかんじらしい

なぜかゴブタが人間の軍隊と仲良くなって帰ってきたついでにかい蜘蛛も狩ってきたらしい

その中にはカバル一行も入ってた

一応クデュックサミットの控え室に全員よんで話をする

綾音「私がクデュック連邦王国の国王のリムル・ゲヴィターです」

綾音「公式の場以外は綾音でいいですよ」

ブルムンド王国の使者「本当にスライムが？」

ガバル「そういえば前にはいなかった方々がおられるようですが」

綾音「ええ紅丸に蒼影、朱菜に紫苑」

綾音「あと最近来たミリム」

綾音「ファルムス王国とブルムンド王国からここへの調査つてところですね？」

ブルムンド王国の使者「われわれh」

ヨウム「とういかなんでスライムがこんなにえらそうなんだ？」

ヨウム「なんであんたらは納得してるんだ？」

綾音「なんか最近こういうやつ増えてきたなあ…」

綾音「まあいいやええつと自分は人間とも友好関係を結びたいと思ってます」

綾音「あと貿易も視野に入れててドアルゴンとも盟約交わしてるのでね」

ブルムンド王国の使者「ドアルゴンと!!」

綾音「ええ」

綾音「この地を経由すると商人の利便性の向上、移動工程の短縮、低コスト化ができるかと」

ブルムンド王国の使者「ドアルゴン国王がこの魔物の国を承認したのですか？」

ベスター「その話私が証明しますよ」

ブルムンド王国の使者「ベスター大臣」

ベスター「元大臣です」

ベスター「お久しぶりですヒューズ殿」

ヒューズ「あなた様のお方がなぜこんなところに？」

ベスター「リムル様のおっしゃってることは本当です」

ベスター「ガゼル王とリムル様は盟約をかわしております」

ヒューズ「そういうことでしたら我々の協力はやぶさかでございます」

ヒューズ「ですがあなたが本当に人間の味方なのか見極めさせてもらいますがよろしいですか？」

綾音「ええまあたしかにこの世界は人間と魔物の仲悪いみたいですし仕方ないですね」

綾音「あと滞在してもいいですよ私たちはそちらが攻めてこない限りは攻撃しませんので」

綾音「オークロード討伐に関しての情報というのは一般向けの情報網に乗ってるんですか？」

ヒューズ「いえ、国王とごく一部のみです」

綾音「でしたらヨウムさん、あなたに英雄になってもらいたいのです」

ヨウム「ええっ！」

綾音「クデュック連邦王国はヨウムさんの援護をしたという風にし、英雄を助けた信用できる魔物ということになるので」

綾音「たしかにつぶそうとする勢力には抑止力にはなりますがそれでは人間との関係を築くことができないので」

綾音「もちろん報酬は本来のオークロード討伐金＋クデュックの最高装備をご用意いたしますので」

夕方

ヨウム「わかった」

ヨウム「にしてもここは大したところだ」

ヨウム「ここに来る前の街の様子を見たら邪悪な魔族じゃないことはすぐに分かった」

ヨウム「俺たちはずっと傷を持つ人間だ自由になりたいと思ってた」

ヨウム「今回は途中で死んだことにしてどこか安全な国にむかうつもりだったからな」

ヨウム「信用するよこれからはリムルの旦那とよばせてもらうよ」

綾音「ごめんでければ綾音でよろしく」

ヨウム「わかったよ」

ヨウム苦笑い

ø 17 悪意

ヨウムたちは白老に鍛えられ英雄として名前を売りに行った
そしてブルムンド王国への直通道路と直通鉄道（真空式高速地下鉄）を開通させるこ
とになった

その後しばらくしたらトレイニーの妹トライアが来る

トライア「私はトレイニーの妹トライアです」

綾音「何か非常事態ですか？」

トライア「ええ厄災が近づいております」

トライア「カラムイEMONスターであるカディブデイスが復活いたしました」

トライア「魔王に匹敵する暴威でございます」

トライア「我が姉トレイニーが足止めを行っておりますがまるで歯が立ちません」

トライア「そしてカディブデイスの目的はこの地である模様」

トライア「天空の覇者であるカディブデイスには地上戦力は無力、至急防衛体制を固
め飛行戦力を用意すべく進言に参りました」

綾音「トライアさんありがとう早速対空防衛システム及び非戦闘員の避難を開始するね」

第2種警戒態勢及び非戦闘員退避、主要施設の地下避難を完了させる

地下要塞内臨時会議所

ヒューズ「カディブデイスが復活したのなら魔王以上の脅威になりますよ」

ヒューズ「何しろ魔王と違い話の通じる相手ではありません」

綾音「ベスター、現段階での兵器でカディブデイスへの対空防衛能力で対応できる？」

ベスター「現段階での対空火器ではかすり傷つけられるかどうかICBMの弾頭を爆破

魔法の埋め込んだ魔鉱塊に変えたところでも損傷与えられるかどうかですね」

綾音「戦闘機今から作っても時間足りないし……」

ミリム「何か大事なことを忘れてはいないか？」

綾音「ミリムは最終手段で暴れてほしい」

ミリム「ガーン」

ミリムめちやめちや落ち込む

綾音「カディブデイスを倒す各戦闘員は対空装備及び戦車の弾はリーサルおよびデストロイ、ICBMの発射シーケンスを直前まで完了させておいて、弾頭はデストロイで」

全員「はっ」

カディブデイス戦

紅丸の大規模爆破でも効果なし

綾音「ICBM発射!!」

戦闘班「了解目標の自動追尾；

戦闘班「うってえええ!!!」

綾音「対空ミサイルうらてえええ!!!」

戦闘班「撃ち方はじめ!!!」

綾音「戦車部隊撃ち方はじめ」

するとサメ型の魔物を召喚

ゴブタやオークたち鬼人、ガビルなどがサメ型の魔物を撃破していく
カディブデイスにICBM着弾するがかすり傷

綾音「ICBM全弾の使用許可」

綾音「同時発射せよ」

戦闘班「了解」

ミリムが駄々こねて参加したがってる

鱗マシンガンで戦車及びミサイルポットの被害甚大

綾音「全戦闘員退避」

綾音「あとは私が攻撃する」

全員「了解」

綾音の飛行能力で空中戦を開始

レーザーや鱗マシンガンを撃たれるが回避

綾音「カエデ。ミサイルとICBMの発射及び残存している戦車での攻撃頼んだ」

カエデ「分かりました」

綾音「全隊へ次ぐ全ての制御をカエデに託した安全距離へ避難して」

するとカティブデイスがミリムの名を叫んだためミリムに攻撃許可を出した

綾音「たぶんこないだのやつだと思うから生かしておいて」

ミリム「わかったのだ」

ミリム「ドラゴバスターあああああ」

すると依り代以外すべて破壊してフォビオのみにしてフルポーションをかけて治し

た

ø 18 未練

フオビオから中央道化連の存在と今回の事情聴取をした結果むぎいとする事になった

するとカリオンが出てくる

カリオン「きづいてたみたいだなミリム」

ミリム「当然なのだ」

カリオン「よおそいつを殺さず助けてくれたこと礼を言うぜ」

カリオン「お前がゲルミュットを遣った仮面の魔人なんだろ？」

綾音「そうですねできるだけ殺したくはなかったですけど」

するとカリオンがフオビオに思いつきりぶん殴る

カリオン「わるかったな部下が暴走したみたいだ俺の監督不行き届きつてことで許してやってくれ」

綾音「わかりました」

カリオン「今回の件借りにしておく何かあれば俺様を頼ってくれていい」

綾音「えつと本来なら装甲版20層と戦車、対空ミサイルとICBM代で金貨100

0枚は欲しかったところですけど不可侵条約と自由貿易協定結んでももらえればいいですよ」

カリオン「よかろう獣王国ユーラザリラビーストマスターのカリオンの名において貴様らに刃を向けぬことを誓ってやる」

カリオン「あと自由貿易に関して許可しよう」

綾音「ありがとうございます。」

カリオン「また会おうリムル」

カリオンはフオビオと部下を連れてテレポートする

その後、国に戻り鱗マシンガンの残骸とカディブデイスが出したサメ型の魔獣を持って帰りサメ型の魔物でパーティーをした

あと兵器開発部に鱗マシンガンの残骸を渡したら好評だった

リムルはなぜか唐突に仕事肉といって魔王のもとに帰った

綾音「またねー」

その夜夢にシズさんの未練だった子供たちの指導のためイングラシア王国へVTO
Lで行くことにした(ヴォルフもついてく)

それと国には非常用回線と非常事態にあった場合に作動する自動攻撃平気をONに

しておいた

カエデの偽装身分証とシズさんの形見でなんなく王都にはいった

その後自由組合本部にユウキ・カグラザカというシズさんの教え子で自由組合のトップやつてる人に会いに行く

ユウキの計らいで非常勤講師をすることになった

そしてユウキに教えることになった5人の子どもの話を聞いた

5人は国が秘密裏に召喚した召喚者で失敗した子どもをシズさんに引き取られ自由学園へ来た子どもなのだという

綾音「なるほどそれならクデユツクの科学力で何とかして見せますよ」

ユウキ「本当ですか？」

綾音「まあ最悪肉体は変わってしまいますけどできるだけそれはしないようにしたいです」

ユウキ「ぜひお願いしますとできることならあの子たちを救ってあげてください」

綾音「出来次第そちらへの技術提供させていただきます」

◊ 19 シドウ

つとさつそく教室入っていきなり炎系魔法で攻撃されるがかわす

綾音「危ないですよそんな教室入って黒板消し落とすノリで炎系魔法使ったら」

黒髪の女の子（クロエ）「なんかシズ先生に似てる」

赤髪の男の子（ケンヤ）「全然似てねえだろ」

出席確認をする

綾音（いちおうこういうの小学校時代やった気がするけどあの後すぐ制度変わって3年生のときまでしかやってなかったなあ。。。）

綾音「ケンヤミサキ君」

ケンヤ「……」

綾音「リョウタセキグチ君」

黒髪の男の子（リョウタ）「……」

綾音「ゲイルギブスン君」

茶髪の男の子（ゲイル）「……」

綾音「アリスロンドさん」

金髪の女の子「;;」

綾音「クロエオベールさん」

クロエ「;;」

綾音（警戒されるよねしかもつらい思いしてきただろうに）

綾音「わかりました全員いますね」

綾音「これから短い間だけよろしくね」

綾音「まずみんなの体力知りたいから体力測定ね」

全員「ええー」

アリス「なんでそういうことになるのよ」

綾音「最後まで話を聞こうね」

綾音「種目は先生と鬼ごっこ、先生と模擬戦ね」

綾音「あとお友達紹介するねヴォルフってなまえなんだよろしくね」

ヴォルフ「我はヴォルフよろしくな」

早速グラウンドへ行き体力測定という名の遊びをした

模擬戦時使用させた武器は安全装置付きのスキルによって変化する高周波ブレード

と操作単純化させたレールガン式アサルトライフル

まあもちろん綾音の圧勝だけとある程度所有スキルとかが分かった

ケンヤは炎系魔法

クロエは水系魔法

ゲイルは魔力弾をアサルトライフルの弾に込めて撃つ攻撃タイプ

リョウタは狂戦士化

アリスはゴーレムマスター

だった

綾音「まあ実力差は分かってもらえたらいいんだけど」

綾音「そんな君たちに行っておくべきことがあるんだけど言っていない？」

アリス「ええ」

綾音「君たちを助ける」

綾音「この仮面に誓ってね」

シズさんの仮面を出す

綾音「シズさんにこの仮面もらった時に約束したんだ君たちを救うって」

アリス「わかったあんたを信じる」

リョウタ「僕も」

クロエ「わたしは最初から信じてた」

ケンヤ「なんだよおまえらじゃあ俺だって」

ゲイル「僕も信じることにするよ」

綾音「ありがとうみんな」

そして夜V T O Lでトレイニーに会いに行つた

トレイニー「綾音さん何か御用ですか？」

綾音「トレイニーさん、上位聖霊の住処を知りたいんですけど」

トレイニー「実は入口はいくつかあるんですが私の知るものは消えてしまっているんです」

トレイニー「私たちの仕えてた聖霊女王はお亡くなりなっております」

トレイニー「現在の女王とは接点はなくどこにいるのかもわからない状態なんです」

トレイニー「申し訳ございませんお役に立てず」

綾音「いいえ、こちらでも探してみますので」

◊ 20

上位聖霊

1ヶ月間上位聖霊をカエデの探査能力やドローンでの捜索をしたが見つからず息抜きにピクニックへ来た

綾音「少し先生と遊ばない？」

アリス「いいわね何して遊ぶ？」

綾音「こないだみたいに戦いごっこは？」

全員「ええー」

綾音「だつてみんなの魔素抜いてあげないとだめでしょ？」

クロエ「あんまり運動したくない……」

綾音「あそうだみんなこれあげるからやろうよ」

全員「??？」

綾音「漫画、私のいた世界だと電子書籍だったけどこつちの世界なら本の方がいいかなつて思つて」

綾音「面白い漫画いっぱいあるよおー」

まあ結局綾音が勝つ（素で手加減を知らない）

綾音「でもみんな楽しそうだったし頑張ってたからあげるよ」

全員「わーい!!!」

まあいろいろあつて結果的に精霊女王の場所が分かった

深い森の奥に遺跡のようなものがあり大きな石製の扉があつた

綾音「いい？みんな最悪のケース生きて帰れないかもしれないそれでも入る？」

全員「もちろん(だぜ)」

アリス「怖くなんてないんだからね」

綾音「いくよ」

すこしふれただけで自動で開く

綾音「見た目のわりにハイテクね」

すると脳に直接笑い声が聞こえる

綾音(テレパシー?)

綾音「精霊さん？遊びたいのは分かるけど上位聖霊ってどこにいるか知らない？」

精霊「いいよ教えてあげるでもその前に」

すると光の道が現れる

進んでいくとコロッセオのような空間に出る

目の前には古代兵器風のロボットがいる

精霊 「すごいでしょ」

綾音 「この世界の人にしてはすごい技術」

精霊 「さあ試練の時間だよ」

綾音 「このロボット倒せばいいの？」

精霊 「ピンポンその通り」

綾音 「なにかあれば私を見捨てて逃げて」

ヴォルフ 「分かりました」

綾音 「ロボットの知識はクデツクで基礎から学んだからね」

綾音 「こんなわかりやすいロボットの解体なんて楽勝だよ」

すると高周波ブレードで関節部をきれいに切断した

精霊 「ううう」

精霊 「負けを認めるわよ」

綾音 「さっ上位聖霊のところに案内よろしくね」

精霊 「わかったわかった」

精霊 「あれすっごい高性能なんだったのよね」

綾音 「協力したらあれの数倍高性能のゴーレムあげるよ」

綾音「精霊女王のところに連れてって」

ラミリス「言ってなかった？ 私はラミリス、精霊女王なのよね」

ラミリス「それに魔王」

綾音「まあそれは置いてこの子達を救ってくれない？」

ラミリスに助けてもらい精霊を召喚しみんなにつけることに成功した

ゲイルは地

アリスは空

ケンヤは光

リョウタは水風

クロエは未来の自分？を宿した

綾音「一体何が」

ラミリス「私も知らない」

ラミリスの話が聞きさっぱり

ついでにラミリスにアンドロイドをあげて王都に戻る

国に帰ることになったのだがみんな大泣き

綾音「ごめんねみんな、国で待ってる人がいるから」

クロエ「先生、行っちゃいやだ」

ケンヤ「くろっち引き止めちゃだめだよ」

アリス「そうよさっさと行きなさいよ」

綾音「ユウキさんこの子達を任せるね」

ユウキ「ええお任せください」

するとクロエが抱き着いてくる

綾音「わかったクロエちゃんには仮面あげるね」

綾音「これをまた返しに来てね」

綾音「あとアリス達にはクデュツクの技術を使った防具をあげる」

綾音「取説はポケットのの中に入ってるから読んでみてね」

ケンヤ「おーすごい」

アリス「かわいいー」

綾音「世界に1つだけしかないものだよ」

綾音「基礎は一緒だけどみんなの使う魔法や聖霊によって使える機能が変わるから試

してみてね」

綾音「私が転生前いたところでいろいろな世界行っただけどその時にわかったことがあ

るの」

綾音「さよならはまた会うためのおまじない」

綾音「本当の別れはまだまだ先、また巡り会うときまでは寂しいけどまたいつか会えるそう信じてる」

ケンヤ「わかった」

アリス「卒業したら会いに行ってもいいんだからね」

綾音「わかった歓迎するねじゃあまたね」

全員「また会うときまでー」

V T O Lで帰る途中何者かに落とされた

◊ 21 自由と責任

ユウキと話して引き続き自由学園で教育してその後進路を選ばせることになった学校

国に帰ることになったのだがみんな大泣き

綾音「ごめんねみんな、国で待ってる人がいるから」

クロエ「先生、行っちゃいやだ」

ケンヤ「くろつち引き止めちゃだめだよ」

アリス「そうよさつさと行きなさいよ」

綾音「ユウキさんこの子達を任せるね」

ユウキ「ええお任せください」

するとクロエが抱き着いてくる

綾音「わかったクロエちゃんには仮面あげるね」

綾音「これをまた返しに来てね」

綾音「あとアリス達にはクデユツクの技術を使った防具をあげる」

綾音「取説はポケットの中に入ってるから読んでみてね」

ケンヤ「おーすごい」

アリス「かわいいー」

綾音「世界に1つだけしかないものだよ」

綾音「基礎は一緒だけどみんなの使う魔法や聖霊によって使える機能が変わるから試してみてね」

綾音「私が転生前いたところでいろいろな世界行ったけどその時にわかったことがあるの」

綾音「さよならはまた会うためのおまじない」

綾音「本当の別れはまだまだ先、また巡り会うときまでは寂しいけどまたいつか会えるそう信じてる」

ケンヤ「わかった」

アリス「卒業したら会いに行ってもいいんだからね」

綾音「わかった歓迎するねじゃあまたね」

全員「また会うときまでー」

V T O Lで帰る途中何者かに落とされた

綾音「!？」

カエデ「未知の魔法攻撃で吸気不可になり落とされました」

大賢者「空間系結界に封じられました」

カエデ「リムルで非常事態発生アンチマジックシールドにより連絡不能非常電力に切

りかえ最大稼働時間98時間」

カエデ「自動防衛モード起動」

カエデ「一般市民の地下避難完了」

カエデ「衛星も途絶」

綾音「ありがとう」

綾音「やっぱり策略か」

カエデ「避難所にて大量虐殺事件発生損害多数内部に敵多数」

綾音「警備ロボットは？」

カエデ「全滅です」

綾音「さっさと終わらせて行かなきゃね」

???「初めてかな？もうすぐさようならだけど」

???「君の町が邪魔だから潰すことにしたの」

綾音「なるほど宣戦布告ととっていいみたいね」

???「ええもちろん」

綾音「どっかの大国みたいなことするねえー君たち」

???「そろそろいいな？」

綾音「ええまあ名前くらい教えてくれないかな？」

ヒナタ「ああ、神聖法皇国ルペリオス法皇直属近衛師団筆頭騎士兼西方教会聖騎士団長、ヒナタ・サカクチ短い付き合いになると思うけどよろしく」

綾音「同じ日本人同士でも手加減はしないまあ殺しはしないけどね」

◊ 22 覚醒

綾音「さてとスタングレネードある？」

カエデ「ええもちろん」

綾音「よし行けるね」

ヒナタ「自分のスキルと喋ってる余裕あるのね」

綾音「ごめんなさい眠ってて」

スタングレネードと麻酔弾を打ち込み相手の意識が朦朧としてるうちに結界を解除その後クデュック近くのワープエリアで帰還する

綾音「大丈夫？」

蒼影「ええこれくらいどうということはありません」

綾音「結界の座標に衛生砲での攻撃は？」

蒼影「起動前に技術者が全員死亡おそろく内部に侵入されていたかと」

綾音「避難所は？」

蒼影「全くの不明です」

綾音「たぶん教会側とファルムス王国かなとは思うけど」

綾音「対人、対国家にICBMは使いたくない」

綾音「とりあえず結界を張っている起点座標は蒼影達の端末に送った、これで無力化してくれ」

蒼影「御意」

綾音「私はアンチマジックエリアの破壊するね」

蒼影「わかりました」

蒼影達は指定座標に向かい外装の結界を解除

綾音、クデュツク内に潜入

綾音「すごい被害あったみたい」

カエデ「内部センサーの通信をキャッチ、人口の9割死亡」

綾音「フルポジションの残量は？」

カエデ「使用率99パーセントほぼ残ってません」

綾音「これは!？」

そこには無惨にも切り捨てられたりした死体が多数

綾音「酷い」

すると紅丸と思われる爆発が

綾音「行くか」

すると紅丸とヨウムが戦闘になってる

綾音「理由はなんであれ同士討ちは憲法違反よ」

綾音「まあ非常事態だからあれだけどそれで何が？」

紅丸「このアンチマジックエリアの元凶がそのミューランという女の魔法の結界でして逮捕しようとしたところヨウムと戦闘になりました」

綾音「これはなにか裏があるわね」

ヨウム「綾音さんすまねあんたを裏切る気持ちはこれっぽっちもないただこのミューランを助けたいんだ」

綾音「わかったまあとにかく事情聴取したいからきてくれない？」

ヨウム「わかった」

綾音「人工心臓って人数分ストックある？」

カエデ「ええもちろん」

綾音「わかった」

官邸

綾音「ヨウム達には悪いけど抑止力になってもらわないとただの非殺傷国家ではないと」

ヨウム達を別室に呼び出し

綾音「あなた達には申し訳ないけどミューランを刑に処すことになった」

ヨウム「それってどういう」

綾音「落ち着いた聞いて」

綾音「私の国は死刑及び残虐な刑罰は禁止してる」

ヨウム「ああ」

綾音「だが非常事態っていうのもある。さらに被害が人口の9割というとなつてもなく大きくなっている」

ヨウム「ああ」

綾音「国民的には実行犯を刑に処せって思ってると思う」

綾音「だから極刑に処すことになった」

ヨウム「嘘だろ!!!」

ヨウム「嘘だと言ってくれ!!!」

綾音「最後の晚餐を済ませてくれ決行は明日だ」

ヨウム「なあ本当に極刑なのか？」

綾音「ええ」

ø 23 罪と罰

ヨウム「俺は信じねえぞ」

綾音「本当にごめんなさい」

ヨウム「くそっ！」

翌日 ヨウムは官邸の前で待機していた ヨウム（あいつの言う通りならミューランが死ぬことはなくなる）

ヨウム「きたか」

綾音「時間どおりね」

ヨウム「ミューランはどこだよ」

綾音「今くるよ」

するとミューランはヨウムの前に立つ ヨウム「お前生きてたのか？よかった」

綾音「さてとヨウム君も知っての通り彼女には死んでもらうよ」

ヨウム「ふざけんな！俺の大切な家族なんだぞ」

綾音「それはわかっている」

ヨウム「じゃあなんで殺すんだよ」

綾音「彼女の罪は国民の大量虐殺そして国家転覆を目論んでいたことよ」

ヨウム「そんなの知らなかっただろう」

綾音「そうかもしれないけど彼女は私利私欲のために人をたくさん殺したのよ」

ヨウム「それでもミューランは家族なんだよ」

綾音「残念ながらヨウム君の気持ちだけではどうしようもないのよ」

ヨウム「じゃあ何か他に方法があるんじゃないのか？」

綾音「例えばどんなのがあるの？」

ヨウム「ミューランを釈放するとか」

綾音「もう遅いわ」

ヨウム「頼む助けてくれ」

綾音「できないの」

ヨウム「綾音さん」

綾音「ヨウム君はさつきから言ってることは支離滅裂だし自分の意見ばかり押し付けてくるし」

ヨウム「え？」

綾音「私はね人の意見を聞くのが好きだけどね人の命より重いものはないと思ってるのよ」

ヨウム「でも」

綾音「まだわからないようだったらはつきり言わせてもらうけどヨウム君はただのわがままで自分勝手な子供よ」

ヨウム「うっ」

綾音「ミューランは処刑するこれは覆らない」

ヨウム「ちくしょう」

綾音「それにこれはあなただけの問題じゃないのよ」

綾音「最後に言いたいことがあるかしら？」

ヨウム「ミューラン今までありがとうな」

綾音「それではミューランさん執行します」

ヨウム「やめろー!!」

綾音はミューランに麻醉弾を撃ち込み意識を刈り取りその後埋め込まれた人工心臓を摘出と同時にあらかじめ作っておいた人工心臓入れ換える

綾音「ごめんねヨウム」

ヨウム「何だこういうことだったのか」

綾音「ミューランさんの刑は完了した」

ヨウム「綾音さん」

綾音「あとはファルムス王国への復讐かな」

綾音「まあヨウム君にはこれから頑張ってもらわないとね」

ヨウム「ああ」

それから数時間後

綾音「ふあゝよく寝た」

カエデ「おはようございます」

綾音「おはよ」

カエデ「昨日も遅くまで起きていましたが大丈夫ですか？」

綾音「ええ」

◊ 24 反転攻勢

カエデ「いいえ、本当に大丈夫ですか？」

綾音「はい、大丈夫ですよ。ただちよつと疲れているだけです」

カエデ「それは心配ですね。綾音さんはいつも頑張りすぎている気がします」

綾音「そうかもしれませんね。でも、私にはやるべきことがたくさんありますから」

カエデ「それはわかりますが、自分の体を大切にしないとダメですよ」

綾音「そうですね。今度からはもう少し休む時間を作るようにします」

カエデ「それが良かったですね」

綾音「ありがとう、カエデ。君のおかげで助かることがたくさんあります」

カエデ「いいえ、お世話になってるんですから当然のことです」

綾音「私も君のことを大切な仲間だと思っています」

カエデ「ありがとうございます、綾音さん。これからもお互い支え合って頑張りま

しょう」

綾音「そうだね。一緒に頑張りよう」

数時間後

綾音「これより反転攻勢のための会議を始める。」

綾音「ファルムス王国への反転攻勢のため、まずは宣戦布告を行います。衛星レーザーを使って敵軍への警告照射を行い、同時にモニターを投下し、我々の覇権を示します」

カエデ「衛星レーザーを使つての照射、そしてモニター投下ですね。素早く敵軍への声明を行うことが重要ですね」

綾音「そうです。敵軍が動揺すれば、進行してきた軍に対して報復攻撃を行うチャンスが生まれます。我々が優位に立つための絶好の機会です」

カエデ「確かに、敵を混乱させて反撃に転じることができれば有利ですね。どのような戦術を取りますか？」

綾音「私は条件を満たすことで魔王になることができます。魔王の力を使って敵軍を圧倒し、戦況を有利に進めることができます」

カエデ「魔王化の力を使うのですね。それはどのような影響を与えるのでしょうか？」

綾音「魔王化の副産物として、クデユツクの国民の死者を蘇生させることができるのです。これによって、私たちの民衆も希望を持ち、士気を高めることができますでしょう」

カエデ「それはすばらしいですね。敵軍に厳しい打撃を与え、同時に自軍の士気も高

めることができます」

綾音「その通りです。そして、この計画を知った敵軍は恐怖に打ち震え、降伏することでしょう」

カエデ「敵軍の降伏を迎えることができれば、我々の勝利はほぼ確定ですね」

綾音「それでは、計画の詳細を練りましょう。ファルムス王国への反転攻勢を実行して、勝利を掴み取りましょう」

カエデ「はい、全力でサポートします。我々の絆と戦術によって、必ず勝利を手に入れます」

025 終戦と復活

綾音「遺体はコールドスリープしてある？」

カエデ「ええ大丈夫です。表面の傷も治してあるので魂が戻り次第すぐに元通りです。」

その後ファルムス王国にモニターを投下した。

綾音「私はそちらから宣戦布告前に攻撃されたクデュツクの国王リムルテンペストと茨波綾音だ」

綾音「こちらから宣戦布告する」

カエデ「お前たちは我が国に侵攻してきた。これは侵略行為であり、我々はそれに断固たる決意を持って対抗する！」

綾音「またこれ以上の攻撃は貴国が火の海になることになるがそれでもよいのか？」

返答次第では宣戦布告無しで殲滅することになるぞ！ 速やかに回答せよ」

ファルム王「ふっふぎけるなー!! この国は俺様の国だ!!」

ファルム兵1「そうだそうだ！」

ファルム兵2「やっちまえー!!!」

綾音「交渉決裂かあこれでも？」

するとファルムス王国の城にあった噴水を衛星レーザーで焼き切るファルム王「ひいひい!!」

ファルム兵3「陛下お逃げください！」

ファルム王は部下を連れて逃亡するが、綾音がそれを許さなかった。

綾音「最終警告です宣戦布告しますか？」

ファルム王「くそつくくらえだー!!」

綾音「そうですね。では貴方達には消えてもらいますね。」

衛星レーザー発射準備完了しました。

綾音「皆さん、ご覧下さいこれが我々の科学力です。」

カエデ「すごいですね。あのレーザーがあれば戦争なんて一瞬で終わるんじゃないでしょうか？」

綾音「そうですね。あれは強力過ぎて使えません。」

綾音「では皆さんさようなら。」

衛星レーザー照射開始しさらに攻撃した部隊に大規模な魔力弾の多弾頭ミサイルを放ち一気に魔王になった

綾音「あばよクソ野郎ども」

気を失い魔王化した際の”ギフト”の付与

任意の人数の復活

大賢者がミカエル化

攻撃力の強化

何故か着いてきた悪魔の使役

綾音「よしこれで復活だ。」

そして、ファルム王国は消滅した。

その後、トップが死亡したが戦後の日本のようにこちらの指定した国王になりク
デュックの同盟国に生まれ変わった。

クデュック国民「綾音さん、ありがとうございます。」

綾音「どういたしまして。」

カエデ「綾音さんは凄すぎますね。」

綾音「そうかな。」

カエデ「はい。私も綾音さんの役に立ちたいです。」

綾音「カエデが側に居てくれるだけで私は救われているんだよ。」

カエデ「そう言って貰えると嬉しいです。」

綾音「これからもよろしく頼む。」

カエデ「はい。一生ついて行きます。」

幸いにも物的損害は軽微だったのですぐに再建した（頑丈すぎ）

綾音「みんなよく聞いて、今からこの国は変わる。皆が幸せになれる国を作るんだ。」

綾音「今回みたいに大国になればなるほど宣戦布告する国も増えていく」

綾音「だけど、そんな時こそ団結しないといけない。だから君たちにはお願いがある。どうか私についてきて欲しい。」

綾音「君たちなら出来ると信じてる。」

カエデ「綾音さん、私は綾音さんを信じています。」

綾音「時には大量破壊兵器や人や多種族を殺さなければ国を維持出来ない自体にもなるかもしれない」

綾音「でも、決して人殺しを肯定しているわけじゃない。」

綾音「私はただ、国の為国民の平和の為に戦っているだけなんだ。」

026 魔王会議前

突然男の人が来た

ヴェルドラ「私の封印を解いてくれてありがとうございます。ムル・テンペスト」

綾音「えっ？誰？」

ヴェルドラ「我が名はヴェルドラだ」

綾音「あーああの時の」

綾音「封印解けたんだ」

カエデ「大賢者がミカエル化した際に処理能力が256倍になったので」

綾音「なにそれチートじゃん」

綾音「じゃあ早速、ファルム王国の再建を頼もうかな。ヴェルドラに」

カエデ「えっ？まさか……」

綾音「うん。ファルム王国を魔族国家にしてもらおうと思うんだけど。」

カエデ「大丈夫なんですか？」

綾音「まあ、なんとかなるでしょ。」

カエデ「そうですね。きっと大丈夫ですよね。」

その後数日でワルプルギスに呼ばれた

開催までの間の出来事

綾音「はじめまして、クデユックの国王リムルテンペストこと茨波綾音です。」

ディアブロ「クフフフフ、これはこれは、ご丁寧に。私は魔王リムル様の忠実なる僕、悪魔公デーモンロードのディアブロと申します。以後、お見知りおきを。」

綾音「は、はあ。」

グのベニマルだ。」

シユナ「私邪神で魔王の少女リムルです。」

ソウエイ「魔王リムル様の影、忍者王シノビマスターのソウエイだ。」

ハクロウ「わしは、魔王リムル様の剣聖ソードマスターのハクロウと申す。」

シオン「同じく、料理人兼魔王様の親衛隊長、暗黒騎士ダークナイトの称号を持つ、シオンです。」

(今回の戦争の勝利の活躍で肩書きを上げた)

その後戦勝 アンド ヴェルドラ復活祭を開演した

宴が始まり皆楽しそうにしている。

しかし、その裏では……

ヴェルドラ「おーい、リムル。起きろー！暇だぞー！！」

綾音「うるさいなー。こつちだつて忙しいんだよ！」

ヴェルドラ「うむ。わかつておる。だが、少しくらい構つてくれても良からう？」

綾音「はいはい。」

ヴェルドラ「ところで、お前は何をやっておつたのだ？」

綾音「ん？ああ、戦争の後始末だよ。戦後処理。」

綾音「同盟国への報告や敵国の同盟国の対応の会議に……色々あるんだよ！」

ヴェルドラ「ふうくん。そうか。大変そうだな。」

綾音「まあね。」ヴェルドラ「で、何か手伝うことはあるのか？」

綾音「いや、特に無いけど。」

綾音「強いて言うなら、大人しくしていて欲しいかな。」

ヴェルドラ「何!?!我は暴れたいのだが……。」

綾音「暴れるなら専用闘技場（核爆弾級の爆発に対応）で暴れてくれミリムの通常攻

撃くらいなら耐えられる」綾音「あとは、好きにしていよ。」

ヴェルドラ「本当か!!なら我は、あの必殺技を練習しようではないか。」

綾音「へえ。どんな感じにするんだ？」

ヴェルドラ「リムルがくれたアニメで面白いのがあった!!」

ヴェルドラ「かめはめ波とか何とかっていうのを試してみるか」
ヴェルドラは闘技へ遊びに行った。

その後、ヴェルドラは修行した。

そして、遂に来た ヴェルドラ「リムルー!! 出番だぞー!!!」

綾音「はいはい。」

綾音「じゃあ行くよ。」

綾音『瞬間移動』

カエデにある程度任せてしばらくヴェルドラと息抜きに遊んだ

数日後

綾音「ミリムが魔王カリオンに宣戦布告後に獣王国を消失!? 避難民はこっちにむかってる!?!」

綾音「あのバカなにやってんの!」

綾音『瞬間移動』

ミリムの所に飛んだ 獣王「へへっ、もうこの国にはあんたらしか魔族は残ってねえぜ。」

ミリム「ふむ。仕方ないのだ。今こそ真の力を見せる時なのだ。」

獣王（降伏を促そうとして交渉しようとしても聞く耳を持ちやがらねえし）

綾音「バカ……何やってんのミリム！国消失させたんだよ!!!」

ミリム「邪魔が入ったみたいなのだ。またなのだ。」

綾音「逃げ足が早い……」

綾音「カリオンさん……」

ため息 カリオン「おお！久しぶりだな。」

綾音「久しぶりです。すいませんねうちのバカが……」

カリオン「いや、こちらとしても悪いと思っっているし……。」

綾音「いやいや、こんな所で争っている場合じゃ無いですからね！」

カリオン「そうだな……お互い無駄な犠牲は出すべきではないからな。」

綾音「国の再建とそれまでの仮住居はこちらで用意させていただきます。」

カリオン「なんかいつものミリムと違ったな」

カリオン「操られてるような……？」

綾音「まさかミリムに限って？」

カリオン「いや、一応念のためにな。」

綾音「それにしても、何でこんな所でやりあっていたんですか？」

カリオン「それはだな……ミリムが俺が魔王カリオンだと知ると急に襲って来てな。」

カリオン「仕方無く反撃して現在に至るって訳だ。」

綾音「なるほど、そういう事ですか。」

獣王国が壊滅したことは伏せて復興作業へ全力を注いだ。

クデュツクの技術で全再建を1ヶ月ほどかかる見込みでいるためクデュツクのシエルターに仮説住宅を建設し住んでもらった。

その間ミリムが操られたのかごっこ遊びしてるのか分からないがカリオンに攻撃した理由を探っていたカリオン「なんでなんだろうな？」

カリオン「俺はミリムに恨まれる事は何もしてねえと思うし」

綾音「なんででしょうね」

カエデ「とりあえず、ご飯でも食べながら考えてみましょうよ！」

カリオン「そうだな。」

カリオン「じゃあ俺は……このステーキにしようかな……」

(なんか最近ろくなもの食べてない)

綾音達は食事を取りながら考えるのであった。

そして、食事を終えて戻った時に言うのだった。

カエデ「そもそもミリムさんは何で魔王カリオンさんを襲ったんでしょうか？」

綾音「まあこういうことできるのはクレイマンだけだよね」

カリオン「クレイマンか！確かにあいつが黒幕かもしれないな」

綾音「オークロードの件とかも中庸道化連が黒幕だったしまあ魔王会議の時にでも挑発してみるか」

カエデ「クレイマンか……私は好きになれませぬね」

綾音「まあそうよね」

綾音（カエデに嫌われるって相当よ）カリオン「一応魔王ルミナスにも話してみよう」

綾音「そうか、ルミナスに頼めばいいんだ。」

そして、魔王カリオンはルミナスに連絡を取るのであった。

一方その頃……クレイマン達は……

クレイマン（上手くいつてるなミリムの支配さらに上手くいつている）

クレイマン（この調子で、クレイマン魔王になってやるぜ）

クレイマンはファルムス王国へ帰還しミリムの支配をさらに強めた。

ø 27 魔王会議

ルミナス「久しぶりじゃな。」

カリオン「ああ、久しぶりだな」

カリオン「ところで少し頼みがあるんだけど……」

ルミナス「なんじゃ？」

カリオン「実はな……」

事情を話した。

そして……遂に……魔王カリオンは、ルミナスにミリムのことを相談した。ルミナス「なるほど。それは厄介な状況じゃの。」

カリオン「何とかならないか？」

ルミナス「わかったのじゃ」

そして……魔王ミリムは……

クレイマン（計画通りだ！）

（これで俺は魔王になるんだ）

クデュツクの某宿

綾音「獣王国の皆さんをお迎えするために、食事を開こうと思うんだけど誰か手伝ってくれない？」

カエデ「私手伝います！」

綾音「じゃあ、カエデよろしくね。」

獣王国の皆さんが到着すると同時にクデュックの高級料理店に案内した。

すると、クデュックの料理長のヴェルダさんが歓迎してくれた。

ヴェルダ「獣王国からようこそお越しくございました。」

「ごゆっくりしていいって下さい。」

綾音（さすがは高級料理店だね）「どうもありがとうございます。」

食事中ではクレイマン達のことについて話したりした。獣王国の皆さんも協力してくれる事になったしクデュックで滞在してもらったのであった。

〜数日後〜

（魔王カリオンから通信が入った）

カリオン「なあ、魔王会議に合わせてクレイマン軍がクデュックに進軍する予定らしいぞ」

綾音「ちよつとクレイマンに挑発してみようかそれとクレイマン軍は多分秒殺出来ると思うし作戦考えてみよう。」

カリオン「了解だ」

魔王会議の日（魔王カリオンは先に来ていた）

綾音「失礼します。」

ミリム「うむ。久しぶりだな！」

ラミリス「久しぶりねー！元気にしてた？」

ヴェルグリンド「最近姿を見なかったけどどうしてたの？」

ルミナス「そういえばそうじゃな……」

綾音「ちよつと、事情がありまして……申し訳ありませんでした。」

ヴェルグリンド「今回の議題についてだが」

（ミリムが操られていることがバレてないか）

綾音「はい。今回から新しく魔王になりました。リムル・ゲヴィターです。よろしく

お願いします。」

ラミリス「よろしくなの！」

ルミナス「よろしくなのじゃ！」

ヴェルグリンド「よろしくね。」

綾音「早速なのですが魔王としてふさわしくない行いを行う魔王がいます。」

綾音「魔王クレイマンあなたです。」

クレイマン「な、何を言っておるのだ？カリオンよ。」
カリオン「お前はもう終わりだ」

綾音「あなたはミリムさんにこのネックレスをあげこのネックレスに呪いをかけ洗脳しさらに私どもの国、カリオンの獣王国にミリムさんを使い宣戦布告、カリオンさんの国を消失させました。この事実は確認済みです。」

綾音「さらにオークロードの件もが中庸道化綾連が主導してたそうじゃないですか？」

綾音「さらにさらに私どもの国に宣戦布告もなしに攻撃、大虐殺を行ったのもあなたが仕向けたそうじゃないですか？」

綾音「聞くとところによると魔王間の争い事は決闘で執り行われるそうじゃないですか？なので決闘を申し込みます。」

綾音「日時は1ヶ月後、場所は私達の国で開催します。」

綾音「魔王クレイマンさんよろしいですか？」

クレイマン（やばいバレてる）

（こんなはずではなかったのだが）

クレイマン「分かった。その決闘受けよう」

（1週間後） 決闘当日 （闘技場）

カリオン「では、これより魔王クレイマン対魔王リムルの決闘を開催する！」

カリオン「決闘は、クレイマンが降伏するカリムルが戦闘不能にすればクレイマンの負けとなる。」

綾音「なおミリムの通常対人爆破攻撃規模の爆発は許可しますがそれ以上はこの闘技場がもたないので禁止します。」

カリオン「それでは、始め！」

クレイマン「死ね！雑魚どもが」

(まずい、逃げねば)

綾音「私の能力で逃げてても無駄ですよ。」

綾音「空間圧縮！」

空間圧縮をしてクレイマンを閉じ込めた。

綾音「クレイマンさん、私の勝ちです。」

綾音「じゃあ、死んでください」

クレイマンの命を刈り取った。

「1週間後」 魔王達の宴 ルミナス「それにしてもどうやったのじゃ？」

綾音「実はですね……クデュックの技術で空間を圧縮することができますよ！」

ルミナス「なるほど、そういうことか」

ラミリス「つまり、クレイマンの行動を予測して空間を圧縮し捕まえたってわけね。」
綾音「そうね」

こうして魔王クレイマンは滅びたのであった。